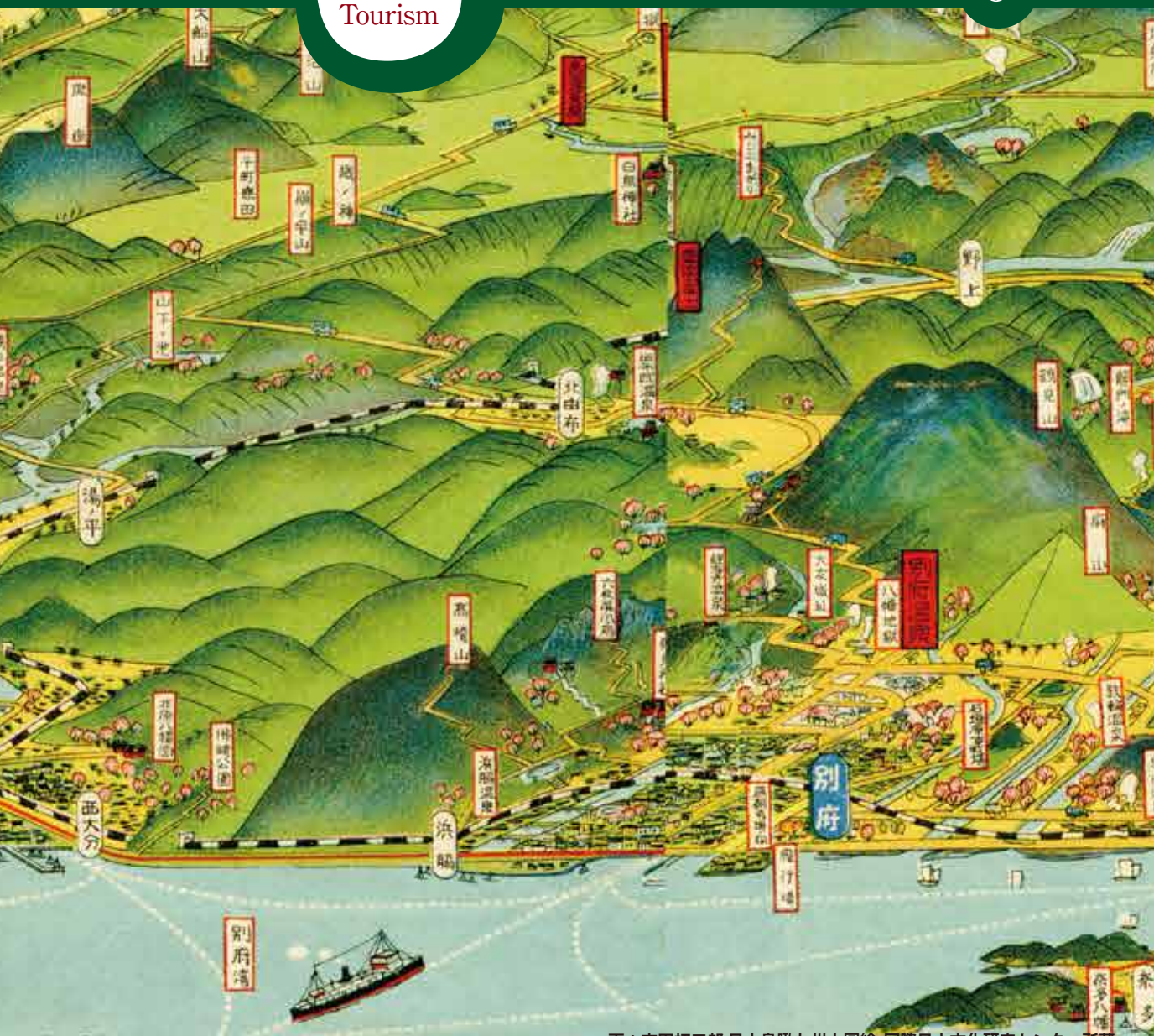


ものがたり観光

Narrative
Tourism

ものがたり観光行動学会誌 第3号



坂大・戸神・松島主

画：吉田初三郎 日本鳥瞰九州大圖繪 国際日本文化研究センター所蔵

ものがたり観光

Narrative
Tourism

ものがたり観光行動学会誌 第1号

ものがたり観光行動学会

Association for the Study and Practice of Narrative Tourism

創刊にあたって 白幡洋三郎	3
■ 基調講演	
社会と宗教の位置関係……そして観光 ／ 釈 徹宗	4
The 2nd Annual Conference Religion and Tourism(October 13, 2012)	
Keynote Lecture: “Social-Religious Loci and Tourism” / SHAKU Tesshu	
■ シンポジウム	
ナラティブと宗教・観光のヒカリ	18
・登壇者 釈 徹宗／江 弘毅／ハンジ リョウ／加藤晃規	
・コーディネータ 高田公理	
“Narrative and Religion in the Light of Tourism,”	
Symposium on Religion and Tourism	
■ 研究論文	
重要伝統的建造物群保存地区における	
年間イベントを活かした空間利用に関する研究	
——今井町を事例として——／魏 小娥	47
Using Spatial Elements to Enhance Annual Events in Districts	
with Buildings of Significant Historical and Cultural Value:	
The case of Imai-cho, Kashihara-shi / Xiao e WEI	
■ 研究ノート	
YKK 観光 —— 黒部の森と調和したグリーンコーポレーションの展望	
——わが師、YKKの創業者、吉田忠雄社長の経営理念について語る——／古畑 稔	64
Perspective in YKK Sightseeing	
on the Linkage of a Green Corporation with the Kurobe Forest:	
The Management Philosophy of Yoshida Tadao,	
Founder of YKK Corporation / KOBATA Minoru	
■ エッセイ	
1 若者旅離れ考——若者は旅をしなくなったのか？／白幡洋三郎	74
2 人間は「粉もん」の食文化にどのような魅力を感じるか／古畑正富	75
3 ケンチャナヨーの深み／李 有師	76
4 富士山の世界文化遺産登録に思う／奥坊一広	77
5 あずきあらいはどこにいる／高田公理	78
編集規程および執筆要領について 概要	79
旅の原稿を求めています	80

創刊にあたって

本学会論文誌創刊の意図は「観光」を論じた読み物をつくることである。

「観光」は地域や学問領域を越えたたのしみであり、学ぶよろこびである。共通のたのしみやよろこびを「読み物」として会員に伝えるために印刷物として配布することは学会に求められている任務だと考えた。

学会員共通の関心をかき立て、共通の課題に応える「読み物」をつくりたい。そして「読み物」であるから研究者以外の一般の人々にも知ってもらい、読んでもらいたい。学会にふさわしい学問的な内容を備え、学術論文の体裁をもった堅めの読み物も、事例報告やエッセーなど柔らかめの読み物も収めたい。書きたい人の熱い思いを受けとめる場も必要だ。こうしてこのような学会誌が誕生した。

投稿する人も手にとって読む人も共通の関心は「読み物」である。すなわち書き手には、人に読ませようとする配慮、読んでほしいという情熱、が求められる。一方、読み手には読み物として妥当かどうか、わかってもらおうとの努力、気配りがあるかどうか、の吟味をお願いしたい。書き手と読み手の双方が求めるものの間に本誌の輝きは生まれるだろう。

『ものがたり観光行動学会』には、呼びかけに応じて、物語が好き、歴史が好き、人が好き、遊びが好き、そんな人々が集まってきた。そしてメンバーが納得できる舞台づくり、環境づくりに取り組んできた。

若い世代には、何か文章を書いて投稿できる媒体が欲しいという声が強い。ここに誕生したのは、まとまった考えを発表したい、聞いて欲しい、読んでほしい、意見をたたかわせたいという思いを持つ人に提供される新たな場所である。

ものがたり観光行動学会 会長 白幡洋三郎

講演

2012年10月13日 第2回年次大会
「宗教と観光」基調講演

社会と宗教の位置関係 ……そして観光

釈 徹宗*

The 2nd Annual Conference Religion and Tourism(October 13, 2012)
Keynote Lecture: "Social-Religious Loci and Tourism"

SHAKU Teshu

〇はじめに

釈と申します。専門は宗教思想の研究です。主に比較という方法論をとるために比較宗教研究と呼ばれることもあります。私は浄土真宗本願寺派の僧侶でして、大阪府池田市にあります如来寺というお寺の住職もしております。また、そこを拠点としてNPO活動をしており、今日も少しご紹介させていただきますが、認知症高齢者の方と関わる活動をしております。

今日はお招きいただきまして光栄です。基調講演ということですが、いただいたテーマである「社会と宗教の位置関係……そして観光」についてどんなお話をすればいいのか悩んでいたのですが、白幡会長から「全ては観光地ではないか」というようなご挨拶がありましたので、かなり気が楽になりました。

1. 聖地・ものがたり・ツーリズム・観光

私の研究テーマの一つに「場の宗教性」というものがあります。「その場が持つ宗教性」でありますとか、「特定の場におけるある種の様式」とかに目を向けています。

例えば、この壇上にしましても、スタッフの方から「テーブルをどこに置きましょうか」とか「ホワイトボードはどこに置きましょうか」とかと尋ねられたんですけども、ここ（正面位置）にご本尊がいますと、やはりその前に立ってしゃべるのは抵抗があります。ちょっと隅っこに寄るような感じになってしまいました。それに、ホワイトボードを向こうに置くと、ご本尊の前を往ったり来たりすることになりますので、これも抵抗がある。結果的に、こういうスタイルになりました。つまり、ご本尊があるというだけでもこの場にある種の力学といいますか、様式が生まれる、そういうわけです。

*宗教学者・相愛大学人文学部教授

また宗教には「教義、思想、信条よりも関係性が先立つ」といった場合も起こります。そしてそれは「場」と密接に関係しております。実は私がNPOなどの活動をしているのも、そのあたりに理由があります。

もともと思想研究ばかりやっていたのですが、ある時から「思想とか信仰よりも関係性が先立つ場」というものについて、またそこに働く宗教性について考えるようになりました。それは自分なりに大きな転換だったわけです。今日お話する内容も、そんな取り組みに関わる部分となっております。

最近には特に「場がもっている宗教性」を積極的にほめたたえるというような行為が大切じゃないかと実感しております。例えば、学校の校歌って、そうなっているんです。どこの校歌でも、その学校がある周りの土地をほめたたえます。東には五月山があって、西に猪名川の流れがあって、などといった調子です。その地で学ぶものの態度として、それはとても重要なことですよ。

あるいは、謡曲もそうなんです。「高砂の浦をうち出でて見れば、淡路島が見えて」とか、そういった詞章が歌われています。いわば、「国ほめ」ですね。その土地をほめたたえると、土地が喜ぶような気がします。我々だって思わぬところをほめられると、うれしかったりしますからね。私など、たまに「いい声してはりますね」とか言われたりするとやけに嬉しいんですよ。「あなた指長いすな」といわれると、「えっ、そうかな。指長いかな」と、自分を見直したりして。

だから、積極的にその土地の意外なところの宗教性に目を付けてほめたたえるということを考えているうちに、3年ほど前から聖地のものがたりやツーリズムについて取り組むきっかけが生まれました。まずはそのあたりからお話させていただきます。

ひとつは、2～3年前前から芸術人類学者の中沢新一先生と「大阪アースダイバー」というのを一緒にさせていただいています。もう一段落したのですが。これは『週刊現代』で連載されて、つい先日、書籍として発刊されたところです。実は、昨日もこの学会の前夜祭のゲストとして来ておられました。

二番目の要因として、ツーリズムの専門家である井門隆夫さんとの出会いも大きなものでした。この人は、長年JTBに勤務した後に観光研究所を設立したのですが（現・関西国際大学准教授）、旅行会社に就職して最初担当した仕事は天理教の「お地場帰り」のツアーだったそうです。井門さんにはマス・宗教ツーリズムのメカニズムを教えてもらいました。天理教には「お地場」という世界創造の場が特定されているんですね。天理教の本部である天理市にあります。そして、その場へ定期的に帰る、といった信仰形態をもっています。それが「お地場帰り」です。すごくユニークな宗教思想ですね。ゆえに、天理教の信者は、定期的にその「お地場」の求心力に引っ張られて帰っていくのです。夏休みになると、子どもたちも帰る「子どもお地場帰り」というのがあります。毎年25万人の子どもが集ま

るそうです。すごい数字です。だから旅行社としては、大きなお仕事になるわけです。ついでに言いますと昨年は浄土宗の法然上人 800 回忌の大法要があり、また親鸞聖人の 750 回忌の大法要がございまして、これも日本中から人が集まってきました。一大ツーリズムです。このような事態が定期的に起こるわけです。ちなみに、近畿日本ツーリストはこのような仏教教団のお仕事をするをきっかけにしてできた会社だと聞いたことがあります。

そうやって大規模な伝統教団はこういう営みによって帰属意識を高めていくのですね。ときどきこうして中央集権的にギュッとベクトルを集中させる。大きな集いの場をもうけるのです。普段は各地でそれぞれの宗教的な場を大切にしているのですが、たまにこういうことをやるんです。そうして、帰属意識を再確認する。昨年の浄土宗や浄土真宗でもそうでしたが、ものすごい人数が集まります。みんな一斉にお念仏しておられる。その一体感はただならぬものがあります。尋常ではないつながり感です。連綿と続いているつながりの中に身を置くことを実感できます。このような営みは、大きな教団にとっては非常に重要なことなんですね。そういえば、伊勢神宮や出雲大社も式年遷宮が行われます。

三つめとして、昨日の前夜祭に登場されていた内田樹先生(神戸女学院大学名誉教授)と、その仲間たちである「巡礼部」の人たちと、「聖地巡礼」と称してそこを歩いている活動です。これはコミュニティ・ツーリズムといったところです。あちこちの街を歩いています。20人くらいで、いい加減にテーマを設定して、いろんな事をしゃべりながら歩くのです。ゆるい集まりのツーリズムです。

このように、こここのところ急に立て続けにご縁がございまして、それで宗教とツーリズムについて考えることになりました。

2. 各地で再発生？ 宗教コミュニティ・ツーリズム

それでは順を追ってお話しさせていただきます。お手元の資料をごらんください。

「宗教ツーリズム」と書いてあります。「メンバーシップのマス宗教ツーリズム」とありますのは、先ほどの「お地場帰り」や「教団の大法要」のことです。定期的に本部へ集合するというような形態ですね。おそらく、こういった制度がないと大きな教団を維持することはできないでしょう。そして、ここにひとつの宗教マスツーリズムが発生する。

また、そのような教団単位の宗教ツーリズムではなく、もっと小さな単位での宗教コミュニティ・ツーリズムが各地で行われています。地域のお寺の婦人会とか、教会の勉強会とか、いろいろとあることはご存知だと思います。しかも、よく調査してみますと、けっこういろいろな形態があります。たとえば、最近はどこのお寺でも参拝者が減っています。そこで、いくつかのお寺がチームを組んで、日程を調整して、お参りにくる人を誘導したりしています。年間行事の法要の日を一日ずつずらして行い、参拝者が「今日は〇〇寺さん

で、明日は〇〇寺さん」といったような巡礼型にするんですね。マイクロバスで迎えに行ったりして。これって、昔の「講」と同じような形態なんです。かつての「講」は、このようにお寺と檀家の枠組みにとらわれず、いろんな法座を横断する組織でもあったのです。河内だと「二十八日講」とか、摂津だと「十二日講」などといった有名なものがあります。講のメンバーはいろんなお寺へ行って仏法を聴聞する。宗教コミュニティーなのです。中世に「寄り合い文化」が発達するようになって、いろんなタイプの「講」が生まれました。しかし、「講」は急速になくなっていっています。

それが、また、コミュニティ・ツーリズムのような形で生まれ始めているといったところですよ。各所を巡礼するツアーとか、真言宗のお寺に行って阿字観を体験するツアーとか、禅寺に行って坐禅をするツアーとか、宗教ツーリズムですね。この動きを応援していきたいわけです。たとえば、永平寺で修行体験すると、自分というものをボキボキに折られて、泣いて帰ることになるようです（笑）。でも、貴重な体験ですよ。いい年をした大人が枕を濡らして寝るんですから。

もちろん、こういった宗教ツーリズムは昔からあります。というよりも、宗教的求心力に誘われて行く移動こそ、ツーリズムの原型なのです。

かつての宗教ツーリズムの形態を調べてみると、いろいろな工夫があることがわかって、すごくおもしろいです。人々がやってくるように、「音楽」「アート」「芸能」のような要素を取り入れたりしてるんですね。たとえば、「絵解き」というのをご存知でしょうか？ 中世から発達したある種の「語り技法」です。ストーリーを絵物語にした掛軸を使いながら、宗教性の高い物語を語っていきます。西行や白隠といった傑僧も、この「絵解き」で発心したと言われてます。「絵解き」がお上手なお坊さんや尼僧さんがおられて、拝聴するとなかなか心を揺さぶられますよ。「絵解き」を聴聞して回るツアーなんてのも、いいと思いますね。

また、今はあまり機能していないみたいですが、浄土真宗の二十四拝や、浄土宗の関東十八壇林などといった、点在する寺院をつなげるストーリーもあります。西国三十三箇所や四国八十八箇所以外にも、けっこう日本各地にあるんですよ。このあたり、もう一度注目することで活性化することは可能な気がします。

つまり、地縁とか血縁によって結ばれるコミュニティではなくて、その場の求心力に引られられて集まった人たちの集い、そういう小規模な「宗教コミュニティー・ツーリズム」が随所に起こればいいな、などと考えております。

3. 語り継がれる宗教ストーリー

最近おもしろいことを知りました。明治時代くらいまで大阪には「七墓巡り」というのがあったそうで、2年ほど前からそれを復活しようとしている人がいます。陸奥賢さんと

いう人ですが、おもしろい若者です。

「七墓巡り」というのは、大坂の都市部を取り囲むようにしてあった墓地をお盆にお参りしてまわるといふものです。都市へと流入した人の中には「無縁墓」に埋葬される方も数多くおられたわけです。その人たちは、お盆になっても誰もお参りしない。そこで、大坂の人たちは、我々でお参りしてあげようということになったみたいです。それも、飲み食いをしたり、鐘をたたいたり、太鼓をたたいたり、お題目を唱えたり、念仏したりして一種の娯楽としてやっていたようです。芸者さんを連れて回ったりして、大騒ぎをして無縁のお墓をまわっていたようです。

この「七墓巡り」は、江戸時代に始まったみたいですね。そして、江戸時代にはしばしば娯楽に対して自粛令が出たのですが、大坂の人たちは「これはお墓参りなのだ」という建前で、やめなかったとのこと。おもしろい宗教ツーリズムがあったものですね。

あるいは、神戸にもおもしろいものがありますよ。神戸市には外人墓地があります。早くから外国人が暮らしている街ですから。今、古い外人墓地を見学できるそうなんです。神戸市が外人墓地ツアーをやっているんです。残念ながら私はまだ行けておりませんが、私の友人が参加して「すごく興味深いものだった」と言っていました。なにしろ、クリスチャンの墓地はもちろん、ユダヤ教の人の墓地や、ムスリムの人の墓地などもあるらしいのです。ちゃんと各宗教の様式になっているとのこと、ぜひ見学したいところです。やはりムスリムは土葬されているようです。なにしろイスラムは土葬でなければなりませんからね。

近年のエコツーリズムや医療ツーリズムだけでなく、古くて新しい宗教ツーリズムをおススメしたいわけです。宗教の聖地というのは、独特の機能がありますので。例えば韓流ドラマの聖地をツーリズムで回っている人もいますし、オタクのみなさんも聖地巡礼と称してゲームに出てくる場所とかアニメに出てくる場所を訪れています。しかし、それらはやがて消えてしまうでしょう。なぜなら、コアの宗教性が希薄だからです。聖地というのは、一番真ん中に濃い宗教性というようなものがなければ続いていきません。それは単に「信仰」や「信心」だけではない。「教義」「思想」だけではない。ある特有の様式をとるもの。これを私はリチュアル(宗教儀礼)と呼んでいます。そしてコアのリチュアルの周りには、これを何とか存続させようというさまざまな工夫や取り組みがあります。これをここではセレモニーと呼ぶこととしましょう。さらにその周囲には、宗教性などよりも、面白そうだから集まる層があって、これをフェスティバルと呼ぶことにします。聖地で営まれている宗教的な儀礼は、このような三層になっているんですね。そして、コアの宗教性が薄いと、あまり続かない。

具体例として名前を挙げて申し訳ないけど、御堂筋パレード的なものはリチュアルな部分が薄いので、やがて冷えてしまう。さまざまな聖地と、そこで営まれる宗教行為が生まれては消え、生まれては消えるんですけれども、濃密なりチュアルがないと持続は難しい。

そして、コアの領域まで引き込むような「ナラティブ（語り）」が必要です。この場合のナラティブとは「代替ができない。語り継がれる語り」というような意味です。宗教的な物語による独特の求心力。コアへと引き込んでいくその場独特の語り。そういったナラティブが機能して、聖地の求心力を構成しているのだらうと思います。

コアにまで届くナラティブがないと、なかなか聖地が聖地として存続するのは難しいでしょう。いかに周りのフェスティバルを盛んにしてもダメです。ポイントは、コアの宗教性への道筋である「語り」です。

とまあ、そんなふうなことを考えております。

4. 聖地の特性

さて、さらに「聖地の特性」について考えていきましょう。

たとえば、毎年ものすごい数の人が聖地・エルサレムへと向かいます。でも、エルサレムという地は、これまでに数多くの悲劇を繰り返してきました。そして、聖地であるがゆえに、その悲劇を人々を集める求心力へと転換しているのです。それが聖地というものです。聖地には「深い悲しみを求心力へと転換する機能」があります。

そういう意味では、東日本大震災でもきっと何かあり得るのではないかと思っています。なにしろ東北は宗教性豊かな場が数多くあるところですから。

大きな悲しみを、宗教的なストーリーにつなぐことによって聖地が聖地となっていくのでしょう。東日本大震災は、本当に大きな苦悩と悲嘆でありましたが、今こそ東北の聖地に期待したいと思います。ただ、原発の問題があってややこしいのですが……。

聖地へ行けば、苦痛や苦悩を共有するコンパッション（共苦）が起こります。それが繰り返り立ちあがっていく過程なのです。その場へ身をおくことで、同じ痛みを追体験するといった事態が起こったりします。もちろん、当事者の苦痛・苦悩にははるか遠くおよびませんが、わずかではあります共苦の現象が起こります。聖地はそういう能力をもっているのです。それが聖地です。

エルサレムでも、ピアドロローサという道があります。これは、イエスがゴルゴダの丘まで十字架を担いで歩いたとされている道です。今でも多くの人が、このピアドロローサを十字架を担ぎながら歩いておられます。これもコンパッションの形態です。ゴルゴダの丘に着くまでに、イエスは3回ほど力尽きて倒れるのですが、その場所が特定されています。そして、その場所を巡礼者は、涙を流しながら触っておられます。イエスの痛みを自分も追体験しているのです。こういうことは聖地でなければ、なかなか起こらない。大きな悲劇を求心力に転換する装置である聖地。それが、今回の大きな災害においてもヒントになるだろうと確信しております。

さらに聖地の特性を挙げますと、聖地では無防備になることができる、というものがあ

ります。我々は、普段、バリアーを張って暮らしています。都市生活というのはバリアーを張っていないと生きていけません。いつも自分というものを守っていないと、都市生活は無防備でいたら傷ついてばかりです。だから我々はいつもバリアーを張って「自分というもの」を守って暮らしています。人ごみの中でヘッドホンを聴くとか、携帯をずっと触るといのはある種の防御戦略でもあります。

しかし、ずっとバリアーを張りっぱなしだと、心が錆ついてきて動きがにぶくなります。「心の共振現象」が起こりにくくなってきます。無防備になれる時間とか場所がないと、人は生きていけないものなのです。そのような時間や場所を求めている現代人は少ないと思います。週末になるとOLさんたちがパワースポットに行くのも、そういうことなのでしょう。パワースポットに行って、無防備な自分になる。神社の境内などに行くと、何にもないでしょ。そこにあるのは、宗教的な場だけ。そういうところに身をおく。無防備な自分になる。そんな時間や場所が人間には必要ですよ。そこには世俗的な価値や秩序は、いったんカッコに入れられる。

さて、このように世俗の価値がカッコに入れられた状態を、宗教学ではコミュニタスと言います。普段背負っている社会でのポジションとか、上下関係とか、いろんな価値や秩序が外される。それがコミュニタスです。

例えば、イスラムのメッカ巡礼などはコミュニタス状態となるようです。なにしろ、誰もが白い布を2枚、身体に巻いているだけなのです。その人がどんな社会的価値をもっているかさっぱりわからない。隣の人が国王かもしれません。でも、そんな世俗的なものを横において、みんなで巡礼している。カーバ神殿の周りをぐるぐる周る。このようなコミュニタス状態というのは、人間の生命力に直結していると思われれます。だから人は聖地へと向かうのです。逆に言えば、宗教儀礼の場に世俗的な価値とかを、できるだけもちこまないことが大切なんですね。

また、コミュニタスというのは日常のバランスが崩れて、非日常状態になります。そこは異相の人や仮面の人などが横行する怪しげな場にもなります。宗教とアートや芸能の源流はかなり重なっているのですね。

5. 大阪の宗教性

それでは、宗教・聖地・ツーリズムといったテーマで、私の個人的な活動や事例をご紹介します。まずは「大阪アースダイバー」と「聖地巡礼」という活動についてお話しします。

先ほどお話ししましたように、ここ2～3年は大阪アースダイバーということをやっておりました。

「アースダイバー」というのは、元々ネイティブアメリカンの神話だそうです。ある鳥が

水や大地へと飛び込んで国が誕生したといった話のようです。中沢新一先生が、「その土地へと身を置いて、その宗教性を探る」といった取り組みをアースダイバーと呼んでおられます。とても宗教的かつアートな行為です。

中沢先生の『アースダイバー』という著書は、東京を取り上げています。今よりもずっと海面が高かった時期、縄文海進期においては、今の東京はもっとリアス式海岸的に入り組んだ地形でした。現在の東京駅や銀座や築地あたりは海の中です。

その古代の地図通りに歩いて行くと、岬の突端に古いお寺や神社があることがわかる。また、斜面などの入り組んだところに昔からの墓地がある。つまり、古代人は岬の突端を聖地としていたのです。そこには、石を置くなどしてランドマークのようなものをつくったようです。そこには住まない。また、女性の子宮がイメージできるような入り組んだところに埋葬する。そしてその形態は現代においても通じている。現代人は都市を自由自在にデザインしてきたように思っていますが、実は古代からの土地の記憶を上書きしている。とまあ、それが東京アースダイバーのお話でした。

では大阪はどうでしょうか。縄文海進期の大阪の中心部は、ほとんど海です。八十島と表現されるほど、数多くの島が点在していました。東に生駒山があります。こんな感じの山脈です。河内のあたりは海です。

そして、大阪の中心部で唯一海没していないところ、これが上町台地です。ここだけが高い。そして、まさにこれが大阪の宗教ライン、宗教性の背骨です。そして、その先端は聖地だったのです。難波宮があったのも上町台地の先端です。今は移転させられていますけれども、坐摩神社とか生國魂神社もここにありました。ここでは、天皇による宗教儀礼が行われていました。

その後、本願寺もここに造られています。また、その後は大阪城が造られます。現在の姿で言いますと、上町台地に沿って寺町がありまして、四天王寺があって、住吉大社があります。このラインはやがて熊野へと続いていきます。

この上町台地の先端は、ちょうど霊山・生駒山の山頂と平行になっています。そして、上町台地の根元にある住吉大社は、高安山という昔からの重要な地と平行です。また、河内の古墳群と堺の古墳群も平行になっています。すなわち、上町台地という宗教的な縦軸と、いくつかの要素がつながる宗教的な横軸がクロスした場所、それが大阪なのです。中沢先生は、この南北の縦軸を「アポロンの軸」、東西の横軸を「ディオニュソスの軸」と呼んでおられます。ロゴス的合理的政治的なのがアポロンの軸、パトス的で不合理で呪術的なのがディオニュソスの軸です。私はこれを「ヒコ軸」と「ヒメ軸」と呼んでいます。ご存知の方もおられるでしょうが、古代の日本社会ではしばしば男女対による祭政二重構造を確認することができます。これをヒメヒコ制と呼びます。「アマテラスとスサノオ」「サホヒメとサホヒコ」「ウサツヒコとウサツヒメ」「卑弥呼と弟」など、けっこう事例があり

ます。人間の靈性の発揮にはいくつかのパターンがあります。その文化圏、民族、地域、時代、特有のパターンもあります。日本の靈性の発揮には、「ヒメとヒコ」という定型があると言えるでしょう。これは意外と重要な日本精神史のひとつの流れではないかと考えております。ヒメの方は不合理、情念、宗教性。ヒコの方は、権力でもあり政治でもある。この制度は、我々の宗教的メンタリティーにすごく合っているのではないのでしょうか。ついでに言いますと、奈良もおもしろいところです。北部はすごくログスティックで、しっかりとデザインされているところなんです。しかし、南部は混沌としている。私は、北部はヒコ奈良で、南部はヒメ奈良だ、などと考えております。

さて、東京や奈良や京都は、土地の縛りが強すぎて、あまりデザインを変えられない。これに対して、大阪はほとんど海や川だったのでデザイン性が高い。ここに大阪という地の特性があります。なにしろ、坐摩神社や生國魂神社だって移動させてしまうのですから。大和川や淀川の流れも変えてきました。もし、人間が自由自在にデザインしてきた場所を都市と呼ぶならば、大阪は日本で「都市」と呼べる数少ない場所の一つでしょう。

なにしろ大阪という地は、いろんなものが流入してくるところなんですね。大和の方からは太子信仰の流れがあります。点々と太子信仰ラインが続いている。京都からは、天神信仰の流れがある。なんだか吹き溜まりのようにごちゃごちゃにたまっているところが大阪という場所です。

また、大和があって大阪があるとか、京都があって大阪があるとか、東京があって大阪がある、というように二番手の街、あるいは弱者が集う街といった性格もあります。色んなものが形を整えずにノイズが多い形態のままで併存している。そういうところが大阪の特性だと思います。

大阪の宗教性の基盤である南北の軸は、わりとわかりやすいのですが、東西の軸を実感するのはある種の感性が必要です。東西は、東の靈山・生駒山と西の海という太陽の運行の軸ですね。この生駒というのは、日本で唯一大都市圏に隣接している靈山だと言われてます。こんなに大都市にぴったりくっついている例は他に見当たりません。生駒を調査すると、大小無数の宗教グループがたくさん存在します。伝統宗教の寺社もありますし、民間宗教者の活動も盛ん。中には、タイガーバームガーデン的な施設があったりします。墓地・霊園も多い。韓国の寺院が密集しているところもある。シク教やラスタファリズムまであるそうです。ラスタファリズムというのは、ジャマイカの宗教です。こんなにいろんな宗教が混在しているところは、やはりめずらしい。

ちなみに、最近、生駒の宗教力が落ちてきていると聞いています。どうも、第二阪奈道路のトンネルが原因らしいのです。生駒に大きな穴を開けてしまったら、お滝場の水量が落ちたみたいですね。こういうことで靈山の聖性が落ちるんですね。今、生駒山中の韓国寺院は、だんだんと街の中に降りてきています。鶴橋とか生野のあたりに、どんどんお寺ができています。

この霊山・生駒が東にあって、西には海がある。大阪はやはり沈む夕日の靈性が強い土地です。今でこそ夕日が見えにくくなっていますが、昔の臨海線は崖になっていて、ちょっと小高いところに登れば、西に沈む夕日が見えたんですね。それは大阪の宗教性の原風景です。西に沈む夕日のメンタリティは、この土地の古層だと思います。その代表的な場が「四天王寺の西門」です。ここは夕日を見ながら瞑想する場なのです。

また、大阪という街が成立していく過程で、浄土真宗の寺内町という独特の形態が大きく関与しているのですが、今回、この話にはふれないでおきます。もしご興味がおありの方は、拙著『大阪の神さん仏さん』（140B）をご覧くださいければ幸いです。

とにかく、西の海に沈む夕日の宗教性が豊かな地であったということです。そしてこれに関わる宗教ストーリーが数多くあります。たとえば、空也という中世の遊行僧をご存じでしょうか。京都の六波羅蜜寺には空也の像があります。大変素晴らしいものです。ぜひご覧ください。この像では、鹿の角の杖をもち、首から鐘をつりさげています。鐘をたたきながら念仏して回った人です。像の口から六体の仏が出ています。空也が「南無阿弥陀仏」と称えたら、その一文字一文字が仏となって口から出た、そんな造形なんです。

この空也と同時代に、千観という位の高いお坊さんがいました。千観は、立派な高僧となってもなお自らの歩む仏道に悩んでいたんですね。そこで、最近、市中でその名を耳にする空也という人に尋ねてみようと思心します。京の市中でボロボロの衣をまとって、念仏しながら歩いている空也を見つけて、千観は教えを請います。しかし、空也はまったく取り合わずに行き過ぎてしまいます。千観は何度も何度もその袖にすがって、真剣に仏道とは何かを問う。そうしたら、空也はたった一言「捨ててこそ」と言ったそうです。その言葉を聞いた千観は、それまで来ていた立派な衣をその場で脱ぎ捨てて、西へ西へと向かい始めます。そして、箕面の辺りまで行き、そこから西に沈む夕日を観ながら仏道修行を完成させたそうです。

この空也さんがうろうろした四条の河原の辺りは、死者と生者の境界線であり、宗教者や芸能民が活躍する場だったんですね。やはり境界線上というのは、いろいろと怪しげで興味深いものが発生します。私たちの「聖地巡礼」も、このような境界線を歩くようにしています。

空也は「市の聖」と言われていました。市いちというのは人々の欲望が交錯するハレの場だった訳です。でも、そのハレの場を支えているのは宗教者とか芸能民だった訳で、宗教性がなくなると「市」は消費するだけの場所になってしまいます。いわばハレが常態化してしまう。ハレが常態化すると日常がだめになる、ケが枯れる。そんな「市」の宗教性を考えながら歩いたりすると、街の別の面が見えてきます。

6. 聖地巡礼という取り組み

その「聖地巡礼」について少しお話しします。

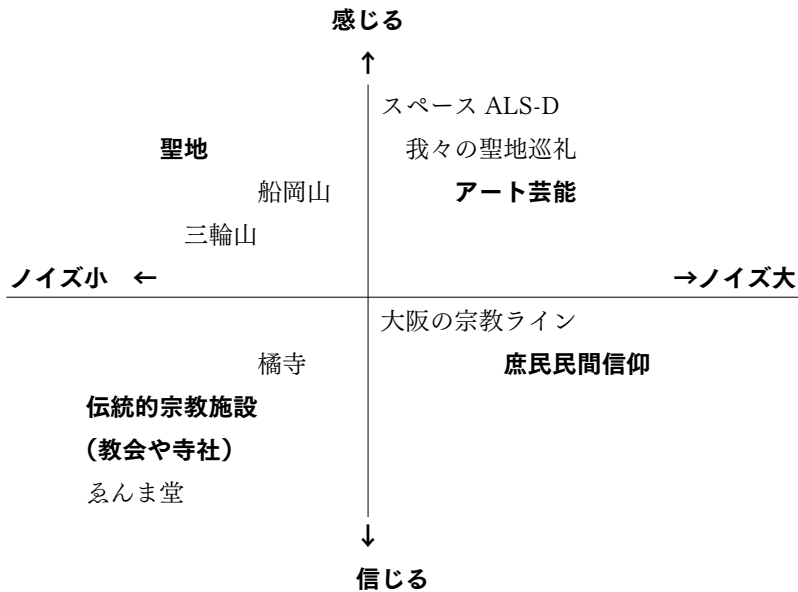
内田樹先生たちと一緒に、聖地巡礼と称して街歩きをしております。やってみると、あらためて、「人は聖地に呼ばれて動く」「宗教性に突き動かされて移動する」ということを実感します。これまで、大阪、京都、奈良と歩きました。次は熊野へ行く予定です。

順番にお話ししましょう。最初は、この應典院がある上町台地を先端から南下しました。そして、四天王寺の西門で落ちる夕陽を見ながら語り合いました。やはり大阪はずいぶんノイズの多いところでした（笑）。立ち並ぶお寺の横にヘンな意匠のビルがあり、だらしないデザインの看板があちこちに掲げられています。寺町では、密集するお寺と共にラブホテルが林立しています。私は「生と死のアジール」などと呼んでいます。とにかくごちゃごちゃしています。単に異物が混在しているというだけでなく、なにやら土地の宗教性を削いでしまうような流れになっているんですね。この状況を見て、内田先生は「大阪は経済じゃなくて、靈性がダメになっているんじゃないのか。この地がもつ生命性をよみがえらせるのが、これからの大阪が向かうべき道ではないのか」と語っておられました。昨日の前夜祭でも同様の発言をしておられましたね。大阪はそもそも成熟した宗教性豊かな土地なんだから、宗教性を復活させないといい街にならないのじゃないか、とのことでした。そうかもしれません。大阪の元型に高い宗教性があることは間違いないのですが、よほどこちらの感度を上げねばそれを感知することはできません。ただ、まあ、その分、大阪は語る要素がとて多い場でした。とにかく一筋縄ではいかない地域ですね。

第2回は、京都の船岡山、蓮台野、鳥辺山から西大谷あたりを歩きました。西大谷や鳥辺山は、古代からの遺体の遺棄場所だった訳です。そこを抜けると清水寺さんに行き着きます。清水寺って、五条の坂を上っていくといかにも観光寺院といった印象でしょ。ところが、お墓群を通過して清水寺へいくと、清水さんが本性を表しますよ。なんかおどろおどろしい感じで。なぜここにこのお寺があるのかがわかる気がします。我々が行ったときは、日暮れ時であり、小雨が降っていました。巡礼部のみなさんは、「果たして我々は日常へと戻れるのか?」と言っていました。それほど非日常性の強い場だったということです。これ、おススメです。ぜひ西大谷から清水寺に上がって観てください。

第3回目は、三輪山へ行きました。ここは、大阪とは対照的で、ノイズが全然ないところですよ。ご神体へと足を踏み入れたらしゃべることさえできません。そこにあるものを何一つ持って帰ってもダメ。そして、ゴミ一つ落ちていない。裸足で登っている人もおられます。人為は最小限にとどめられています。ペットボトルとか、まったく落ちてない。この三輪山の様子を見て、ああ日本もまだ行けるなと思いました。もし、三輪山にゴミが落ちるようになったら日本もダメなんじゃないかと思えます。

こんな感じで歩き回っているのですが、我々の取り組みは「信じる」よりも「感じる」に近いと思います。それに、いかにも聖地といった場所ばかりへと足を運んでいるわけではありません。できれば「潜んでいる宗教性」を解読したいと考えています。図表化してみると、以下のような感じでした。



ノイズが小さなところもあれば、大きいところもあります。そして我々は「信じて・感じる」の間を行き来しています。例えば「ノイズがすごく少ない」「信じるというベクトルが強い」といった場となれば、教会とかお寺の本堂になりますね。

アースダイバーという営みは、「ノイズの多い」場の宗教性を感じたりします。これは、信じているわけではないけれど、その土地の声を聴くという感じでした。

一方、「ノイズが少ない」、しかも誰が行っても「感じる」ことができる、となれば三輪山とか鳥辺山みたいな、いわゆる聖地でしょうか。

こんな感じで分類してみると、我々の現状はやや上方部に偏在気味ですね。できればこれから四つの領域を次々とまたいでいくようなダイナミックな宗教ツーリズムを展開していきたいところです。

7. 巡ること自体が宗教性

最後に、聖地を巡ること自体が生きている証しのような人をご紹介します。

ALS（筋萎縮性側索硬化症）という難病を生きとおられる甲谷匡賛さんです。原因不明

で、治療方法のない難病です。10万人に1人ぐらいの割合で突如発症するそうです。全身の筋肉が不随意になるという病気です。進行性の疾病ですので、死に至るまで病状は進行していきます。止まることなく必ず死にいたるまで進行し続けます。

甲谷さんは、今、目の玉だけがかすかに随意で動かせるだけです。この病気の残酷なところは、筋肉が不随意になるだけで、それ以外は健常に機能するという点にあるかもしれません。つまり、五感や思考などはクリアーに機能しているわけです。いろんなことを考えるのに、それを表現する能力がなくなっていく。甲谷さんも、一時期「観念の塊」のようになったそうです。

現在、甲谷さんは「スペース ALS-D」という京都の町家を改造したお宅で暮らしています。かつては家庭ももっておられたのですが、現在では天涯孤独の身です。もともとおつき合いがあった仲間たちを中心に、生活を成り立たせています。「スペース ALS-D」はとてもユニークな場で、半分は甲谷さんの生活スペース、半分はオープンスペースになっていて、そちららでは舞踏家たちのパフォーマンスが行われたり、アートな活動が行われたりしています。

私は甲谷さんがALSになられてから知り合ったのですが、彼はもともととても宗教性が成熟していた人だったそうです。仏教にも精通していたみたいですね。だから、ALSになってからも、よく「慈悲の瞑想」をしておられます。この「慈悲の瞑想」というのは、上座部仏教の人たちがよくやる瞑想です。最古の経典である『スッタニパータ』に出てくる文言をもとに瞑想します。まずは、自分の心と体がすごく安寧であるというイメージを持ちます。その瞑想がうまくいけば、次はちょっと意識を拡大して、自分の身の回りにいる人の心と体が安寧であることをイメージする。それができるとさらに広げて自分の知っている知人や友人の心と体がすごく静かで安寧なことをイメージする。そんな調子でどんどん意識を拡大して行って、最終的にはすべての生きとし生けるものの安寧を願うという瞑想です。甲谷さんは、全身が不随意な中、これをやっておられるそうです。しかし、たいていはうまくいかないそうです。途中でどうしても意識の拡大が止まってしまうんですね。でも、ごくまれに慈悲の瞑想がうまく行ったときは、「明日も生きよう」と実感するそうです。私はこのお話を聞いて、すごく胸をうたれました。「ああ、人間というのは、自分のためだけに生きるのは、なかなか難しいのだな」とも感じました。ALSに苦しんでおられる最中の方が、他者の安寧をイメージすることで、明日も生きようという生命力が生まれるのですから。

さて、この甲谷さんですが、3年ほど前に全身が不随意の状態、出家得度されました。「スペース ALS-D」のすぐ近所に、引接寺いんじょうじさんがあります。千本閻魔堂の名でよく知られています。ここのご住職の尼僧さんが師僧になってくださって、真言宗で出家得度式を行いました。

甲谷さんは、毎日毎日、雨の日も雪の日も、炎天下の日も、極寒の日も、一日も休むこ

となく、寺社仏閣や宗教的な場所を巡り続けられています。ヘルパーさんの力を借りて巡ります。ある意味、生命をかけて巡礼しておられるような状況です。だから我々の「聖地巡礼」の先輩でもあるんです。それは求道の手段なのか、それとも巡ること自体が目的なのか、本当のところは誰にもわかりません。もしかしたら、ご本人もはっきりと自覚していないかもしれない。しかし、宗教性に突き動かされて移動するその姿を、我々はマネしたいと願っています。そのため、私たちは「聖地巡礼」の取り組みの中で、「スペース ALS-D」を訪れました。

「スペース ALS-D」は、まさに徹底した弱者が求心力になっている場です。甲谷さんが何一つ自分でできないからこそみんなが集まる。そして、集まってくる人も、結果的に自分自身が問われる場となっています。

8. 場の「語り」をはじめよう！

私が聖地やツーリズムのことを考えるきっかけのひとつは、「その土地の聖性の賦活」がテーマでした。自らの足元を愛せない、つながりを感じることができない、そんなことでは宗教性が枯れていく一方だからです。そして、東日本大震災以降、さらに「聖地」が求められています。我らは語り始めねばならないのではないのでしょうか。語りこそ、被災者でなくても参加できるつながりです。聖地の宗教性に突き動かされて語り始めましょう。魂を揺さぶる語りを。

大震災直後、80歳の詩人・高良留美子さんが「東北の巫女たちよ、語り始めよ」という詩を『現代詩帖』に発表しました。その詩には次のような短文が添えられています。

「語り継がれてきた本来の神話は、自然の恐ろしい貌を描いて人間に警告してきた。自然を畏怖することを教えてきた。カーリー女神や破壊の神シヴァ、黄泉の国のイザナミ……。しかし人は恐ろしさから眼を背け、矮小な神話を詐りあげた。
 (中略) 東北の巫女たちよ、シャーマンたちよ、よみがえって語りはじめよ」

我々は土地の宗教性を軽視してきました。いつの間にか、土地を自分たちでデザインしてきたと思い込んでいます。デザインできると思っています。なんと傲慢なのでしょう。私たちは宗教的ナラティブなしに生きられません。身体に直結する「場のナラティブ」へ身を投じましょう。その営為なしに、我々の社会の成熟性を高めることはできません。

みんなで聖地へと移動し始めましょう。きっとこれから聖地へとみんな移動し始めると思います。聖地に身をおけば、生きるコアの部分、我々のエロスとタナトスが再生します。宗教性豊かな土地の語りに耳を澄まし、その声を受け取った我々も語り始めましょう、といった提案をさせていただき、本日の話のラストとさせていただきます。お疲れ様でした。

ナラティブと宗教・観光のヒカリ

[登壇者] 釈 徹宗 (宗教学者・相愛大学人文学部教授) / 江 弘毅 (編集者) / ハンジ リョウ (まんが家)
加藤晃規 (学会副会長・関西学院大学総合政策学部教授)
[コーディネータ] 高田公理 (学会副会長：佛教大学社会学部教授)

“Narrative and Religion in the Light of Tourism,” Symposium on Religion and Tourism

0. はじめに——「ものがたり」が人を動かす

高田 (コーディネータ) 佛教大学で教師をしている高田です。

本日のテーマは「ナラティブ・宗教と観光のヒカリ」です。ここでいう「ナラティブ」とは「ものがたり (物語)」のことです。それは、単なる事実の叙述とは違います。物語は、どこかに、語ろうとする人の気持ちが入ってきたときに初めて生まれるのです。

亡くなられた河合隼雄さんがうまいことを言っておられます。「昨日 47 センチのタイを釣ってね」というと、話はそれで終わってしまいます。だけど、両手を広げて「こ～んなタイを釣ったんや。それが大暴れしてね」と言うと、そこに物語が生まれ、相手も聞いてみようという気になる。話の中に、語る人の心の動きが込められたとき、そこに物語が生まれるのだというわけです。

例えば東北に、立石寺というお寺があります。ここを訪れたときに芭蕉は「閑かさや岩にしみいる蟬の声」という句を残しました。立石寺は立派で美しいお寺です。でも、誰もが驚くような大伽藍があるわけではありません。ところが、芭蕉のこの句のおかげで、たいへん有名になりました。

お伊勢さん、つまり神宮でも、西行が「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼる」という歌を詠んでいます。それが何であるかは、よく分からないけれども、お伊勢さんには、不思議に厳かな空気がある、といったような意味でしょう。こういう歌に触れると、人は自分でもそこに行ってみたくないのでないでしょうか。

今日の午前中の話の中で釈さんは、このように何かを感じさせる核を「リチュ

アル」という言葉で捉えておられました。そこに「リチュアル」があれば、その周辺に様々な物語が生まれ、魅力を発揮するようになるとおっしゃいました。

これと同じようなことは西洋人も感じていたようです。例えばドイツの神学者ルドルフ・オットーは、それを「ヌミノーズ」という言葉で捉えました。日本語に訳すと「聖なるもの」ということになるのですが、そういう何かに出会うと、理由は分からないままに人は、何となく人間の心の原点に触れたような気分になるというのです。

ヌミノーズを感じさせるのは、必ずしも宗教施設に限りません。富士山に登り、雲海から太陽が出てくるのを見た人は、ほぼ間違いなく心を震わせられる。あるいは、先ほど豊後大野の村の風景を見せてもらいました。その風景にも心を動かされる何かがあったように思います。それを本学会の理事である李さんは、

「大野市には何も無い、しかし日本がある」

と、じつにうまい言い方で捉えました。これもまたヌミノーズの一形態なのだと思います。そういう意味において、旅や観光で出会う多様な魅力と宗教的なものが、人の心を引きつける仕方には、相互に似たものがあるように思います。実際、旅や観光と宗教的な巡礼などは、どちらも移動を伴いますし、相互に古くから深く関わり合ってきたのではないのでしょうか。

そこで、先の釈さんのお話をお聞きになった3人の方々に、それを踏まえたお話を頂戴しようと思います。最初は、当学会の副会長で関西学院大学総合政策学部教授の加藤晃規さんです。加藤さんは毎年、イタリアを訪れて、その自然と文化を研究しておられます。そのイタリアは、どこの街に行っても、立派な教会があって、いずれも強烈なヌミノーズを発揮しています。それはキリスト教の天国をこの世に現出させているという意味で、一種の「バーチャル天国」なんですね。実際、石の建築物は、冬は暖かいし、夏は涼しい。周囲には美しい自然が広がっています。そんな教会の天井は非常に高く、正面を見ると美しいステンドグラスを通して、いわば「天上からの光」が降り注いでくる。そこに荘厳なパイプオルガンの大音響が響き、お香のいい匂いが漂う。そういう環境のなかで気分よくなっている信者に向けて神父が、神の世界の話をする、まあ参加者は、「そうかいな」と思ってしまうのでしょうか。

イタリアというと、そういう場所のありようを思い出すのですが、まずは加藤さんに、イタリアをめぐる「旅と宗教」の話をお聞かせってもらうことにします。

1. 宗教と観光——ローマ都心の意味ある場所

加藤 バーチャル天国という話がありましたが、私は宗教および都市観光という関連

性の中でローマを取り上げてみたいと思います。ご存じのようにローマは、「エターナルシティ」すなわち「永遠の都」として宗教的には語られますが、それ以外にもいろいろな性格を持っています。観光ということと言えますと、ユネスコが指定している「世界文化遺産都市」の中で、歴史的地区をこれほど大量に包摂している都市は、ローマをおいて存在しないと思います。

その名称は「ローマ歴史地区及び教皇領」といいます。バチカン領と南の方の城壁外のサン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ、これは城壁外という意味ですが、そこの大聖堂をあわせたエリアのことであり、ローマの歴史的文化遺産は、教皇文化つまりキリスト教の文化を基軸にしていることに価値があるというのがユネスコの見方です。ローマは1980年と1990年に登録され、1から10まであるユネスコの登録基準の中の1から6までが入っています。

ローマのもともとの成立は「7つの丘」というキーワードで表現されます。つまり地形的な要素です。そこに宗教的なことによって集落ができることになるわけですが、その後7つの聖堂を建てることになります。これはバジリカという言い方をしていますが、7つの教会堂です。3つが城壁外に、4つが城壁内にありました。そういう古代史の歴史があります。ローマ帝国が滅ぶと、このエリア全体が荒涼の地と化します。500年前後から中世の時代のローマ市内は蛮族が跋扈して、盗みはあるわ、病気は広がるわ、浮浪者は山ほどいるわというような人口5万人ぐらいのまちの時代が長く続きます。そういうところにさらにルターの宗教改革が起こって一層疲弊します。これではだめだということで15世紀ぐらいから反宗教改革という動きが起こりますが、これによって、全国、全世界のキリスト教徒に力を与えるために、カトリックの中心としてのローマのまちづくりが始まります。道路をつくり、教会を復興し、モニュメントをつくって先ほどの7つの教会を短期間で信者が回ることができるように整備をする。それに莫大なお金を投じることを15世紀前後の歴代の教皇たちがやることになります。その中でもシクストゥス5世はものすごいやり手で、1585年から1590年の5年の間に名だたるモニュメントを建て、教会を再建し、道路整備については直線道路を建設します。直線道路を引くこと、つまりインフラ整備をすることによって、7つの教会を短期間で信者が回ることができるように、ということは安上がりに回れるようなサービスをすることによって、荒涼とした小便の臭いするローマからバロックのローマつまりローマンバロックの時代へと移っていくというシナリオが描かれることになります。

午前中のお話で釈さんが、場の意味性ということをお話になりました。ここで指摘しておきたいのは、ヨーロッパのまち、キリスト教徒のまちでは聖なる場所

は実は都市のど真ん中にあるということです。教会は都市の中心につくられます。日本の鎮守の森はだいたい村はずれにあるものです。もちろん、ヨーロッパのキリスト教国の中でも奇跡を起こした岩とか、樹木の足といった自然物がある種のアジュール性を持つ、つまり特別な意味を持ち、特別な場所に指定されているケースはありますし、そこが観光地になっているケースがあります。しかし、キリスト教では毎日礼拝が行われますので、教会という拠点を持たなければどうしようもない。むしろ都市のど真ん中に教会というものがあるためにその周りに人が集まってきて都市ができていくという構造があり、ローマがその代表だろうと思います。ということで、都市のど真ん中に聖なる、つまり意味のある場所がたくさんできてくる。このようなところが日本とは違って面白いです。

現在は、古代ローマのいわゆる政治的なローマを見ることも観光の大きな魅力になっていますが、むしろ、バロック期の教会がつくりだした人文的なアートであるバロックスタイルの教会が観光の中心になっており、観光コースがいくつか設定されています。そこでは、外を歩いていると財布が盗まれるのではないかとびくびくした気持ちになりますが、一步教会の中に入りますとまさに高田さんが言われたようなヌミノゼの安心感を感じさせる別世界があり、そこにはものすごい芸術が転がっていて、その中で至福を感じる。そういう場所がつきからつきと現れるのがサン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラという場所の魅力だと思います。

高 田 ありがとうございます。

ローマの都心には、今も古代ローマの遺跡が残っています。当然のことながら、世界遺産になっています。でも、必ずしも観光客は多くない。多分、余り面白くないのでしょう。というのも、そこにある遺跡や遺物には、それらにかかわる壮大な物語がありはするのですが、それらを熟知している人は余り多くない。とすると、よほど教養がないと、ローマの遺跡を見ても面白くないのではないかと思います。

これと似たことは、たとえば奈良にもあてはまるようです。京都の観光地は、何も知らなくても美しかったり、それなりに面白かったりするのですが、奈良を楽しむには相当の教養が必要となるようですね。そんなことを誰かが言っていたような気がします。

2. 岸和田だんじり祭りが物語る社会構造

高 田 続いて、編集者の江弘毅さんから、岸和田のだんじり祭りをめぐってお話を頂戴します。お祭りといえば、そこに神さんが降りてこない面白くないのですが、さらに動物が出てきたり、人が死んだりすると、そこに必ず神さんが降りて

きて、一気に雰囲気が高まったりします。ところが最近、事故が起きると問題になるので、警察や自治体も非常にうるさくなっていて、なかなか心身ともに興奮できる祭りが少なくなってきたような気がするのですが、はて、そのあたり、いかがなのでしょう。

江 江弘毅と申します。岸和田でだんじり祭りをやっております。所属する町は、宮入が番外三番の五軒屋町です。毎年9月1日に宮入の順番を決めるくじ引きを各町の人たちが集まって行います。それを「三郷の寄合」と言いまして、江戸時代から行われてきました。うちの町は、くじを引かなくていい宮三番なんです。私は平成15年に若頭筆頭をやり、一昨年平成22年に曳航責任者をさせていただきました。今年は朝ドラの「カーネーション」の影響で観光客は65万人だったそうです。

岸和田のだんじり祭りの特徴の一つに神事があります。この神事は各町それぞれに違ってきます。だんじり祭りは「神事」が核にあって、その周りに「神賑わい」という、いわゆるだんじりの曳航があります。その同心円の一番外側に祭りを見に来る人がいる。そういう構造になっているのです。この構造は、天神祭りも同じであるということを天満宮研究所の招聘教授である大阪大学の高島先生から聞いたことがあります。

だんじりの前を曳く青年団の頃は、神事のことはなかなか理解できませんでした。うちの町の場合は、曳き出しの日の朝3時ぐらいに神主さんを迎えて、ひとり一人がお祓いをしてもらいます。二礼二拍一礼のやり方がわからなくて、「コラ鉢巻取れ！」と怒られたりしながら、祭礼のおぼろげな構造が分って来るのは40歳代になろうという頃でした。しかし、何が何だかわからないけれども、とにかく「こうせなあかん」ということを、連綿としてなぞっていくことに意味があるのだと思います。

8月になると各町の祭礼団体で寄り合いが始まります。同時にまちの掃除などもやり始めます。それらを通して互いに顔見知りになり、どこそこの誰ということは分からなくても、あいつは前を曳いている奴だとか、あだ名で呼ぶような関係になり、顔と顔の関係性が深まっていきます。こうして、いわゆるコミュニティが形成されていくわけです。

さて、だんじり祭りとその観光は3層構造になっていると申しました。祭りを見に来ている人を含めた60数万人の「みんな」というものがあり、その中に法被を着て神賑わいをやっている「われわれ」がいる。「われわれ」は、さらに細分化されて五軒屋町や上町、宮本町といったグループに分かれます。それは、法被の違いによって特徴づけられるのですが、その中に生き生きと祭りをやってい

る「わたし」がいるわけです。実際、鳴り物係にしる前てこ係にしる、それぞれに「俺が行けへんかったらだんじりは動けへん」と思っています。「みんな」という大きな共同体。だんじりを曳いている「われわれ」という共信体。その中にキラッと光るエッジの立った「わたし」がいて、「わたし」がそれぞれに物語を持っているのですね。

例えば、あいつは小学校の頃にこけてえらいけがをしたといったことが記憶に残っていたりします。五軒屋町という町は昔、宮入のときの灯明係だったので、今でも提灯を点けて宮入をするといったようなことを物語る人もいます。そのようにグラディエーションの効いた同心円の構造になっているのではないかと思います。

文芸春秋の「ナンバー」という雑誌の依頼で、ジョギングやランニングを特集した別冊を出すときに、関西編の編集に加わりました。わざわざ出かけて走りに行く場所としてだんじりのコースを取り上げ、やり回しの場所や岸和田城の周りの写真、宮入の写真を入れて地図にしたところ、実際に走りに来ている人が結構いました。観光は暦と地図を共有することでもあると思いますが、観光客に来ていただくことのヒントはそのあたりにあるのではないのでしょうか。

高田 暦と地図、ですか。面白いですね。今日の世界では、ほとんどの国が太陽暦を使っていますが、イスラム圏では、いまなお暦は太陰暦です。このように、同じ文明に属している人は皆、基本的に暦を共有し、地図を共有しています。そういう暦と地図が、岸和田のだんじりを支えている人々の間で共有され、そこに3相の構造が実在している。非常に面白いことだと思われました。

そこで思い出すのは、午前中の釈さんの話にあった、「魅力あるものの中心にはリチュアルがあり、その周りにセレモニーがあり、さらにその周りにフェスティバルがある」という部分です。江さんの話のなかのだんじり祭りも、まったく同じ構造になっていることがよく分かりました。

つまり、中心に神事があり、その周りにコミュニティの人々のお祭りがある。さらにその周りに祭りを見るために集まってくる、いわば観光客の層がある。釈さんの話と見事に重なっていて、宗教的なものを巡る人々の営みには、互によく似た構造が成立しているのだということを教えられました。

さて、もうおひと方は漫画家のハンジリョウさんです。京都に住んでおられて、京都のお寺によく行かれるようです。京都のお寺についてお感じになっていることをお話してください。

3. 身近で親しみやすい京都のお寺

ハンジ ハンジリョウです。私は京都の東山区に住んでいます。近くにお寺がたくさんありますので、お寺に行く機会が多くあります。午前中の釈さんのお話の中に西大谷の墓地の話がありました。私は普段清水寺に行くときはお土産屋さんの多い参道を通りますが、西大谷墓地のそばを通りますとたくさんのお墓があって、谷になっていますので歩いていると怖くなってきます。怖くて清水寺まで走って行ったことがあります。この世ではない違う世界にいるような気持ちになる場所なので、そこを抜けて清水寺に出たときには、この世に戻って来たような安心した気持ちになりました。そんな不思議な体験をしたことがあります。

お寺といいますと「門前の小僧、習わぬ経を読む」ということわざがあります。お寺の近くに住んでいる子どもは、知らぬ間にお経を覚えてしまうということですが、それぐらい昔の子どもや人にとってお寺は身近な存在であったということだと思います。

私の家の近くにもお寺がたくさんあり、行きつけのお寺があります。建仁寺の塔頭のひとつの摩利支尊天堂です。なぜそこが行きつけのお寺なのかというと、そこには3つの要因があります。1つ目は、お寺の名前が書いてある赤いとても大きな提灯が下がっていること。2つ目は、お寺はだいたい夕方には閉まってしまうのですが、このお寺は夜になっても明るいオレンジ色の光を煌々と照らしていること。京都のまちは暗いので、明りがまちの暗闇にぼんやりと浮かび上がり、夜でも結構多くのお参りの人が来ています。3つ目は、狛犬の代わりに狛イノシシがいること。お寺の中の色んなところに石でつくったとてもかわいいイノシシが座っています。このようなことが行きつけのお寺になっている理由です。

これらの3つの要因を考えますと、居酒屋さんに似ていると思います。提灯があって、夜遅くまで明かりが点いている。お寺にはあまり人はいないんですが、その代わりにこのお寺にはかわいいイノシシがいて、手を清めるお手水舎もイノシシの口から水が出ていて、それが嬉しくて遊びに来た友人を案内します。

京都のお寺では色々な催しをしています。手づくり市ですとか落語会、座禅、ヨガの催しなどが多いので、若い人にも結構身近な存在になっています。私も色々な催しに参加しています。今日は会場にかわいらしいコスプレの女の子たちがいて、アニメのキャラクターのコスプレだそうです。例えばお寺で仏教にまつわる漫画のコスプレをして、みんなでヨガをするといった会があっても面白いのではないかと思います。ちなみに、私だったら山伏のコスプレをしたいと思います。そのように、お寺がもっと身近で楽しい観光の場になってくれたらいいなと思っています。

高田 ありがとうございます。ハンジさんが山伏の格好をしはったら、かわいらしそうですね。話を聞いていて、そんなことをイメージしました。で、お寺が居酒屋に似ているということですが、京都に尼さんが開いておられた酒場がありました。川端通り二条上がる、にあったのですが、残念ながら今は閉じておられます。また、大阪には「坊主バー」という、お坊さんがやっておられるバーがあります。

先ほど私は、教会はバーチャル天国だと言いました。とすると、お寺はバーチャル極楽なのでしょう。宗教施設は、目で見て楽しい、いい音楽が聞こえる、いい香りが鼻をたのませてくれる。それに、空気も夏は涼しいし、冬は割合暖かい。ただ、5つ目の舌を満たしてくれることはなかりろうと思っていたのですが、例えば坊主バーなら、それも満たしてくれそうですね。つまり、五感全部に働きかけて、もてなしをしてくれる。そういう意味でもハンジさんが言われる「お寺は居酒屋みたいだ」という感じは良く分ります。釈さんいかがですか。

4. キリスト教会の垂直構造——その意味と空間

釈 お三方の話を伺いまして、それぞれに聞いてみたいところをお話いたします。

加藤さんがお話になりましたローマの聖地ですが、地下は墓地（カタコンベ）になっていたりします。そして、そのカタコンベは観光のスポットにもなっています。天国を象徴するような聖なる建造物と、皮一枚下にもものすごい数の遺体を収容しているということがカトリックの面白さだと思います。長い間かけて構築してきた聖性と、初期キリスト教の持つややおどろおどろしいところ。このような両側面をあわせ持っているところがカトリックの魅力であり、二枚腰、三枚腰のしたたかさを感じるころでもあります。一方、プロテスタントにはあまりそういうところがなくて、もっと合理的に処理してしまう傾向が強いように思います。アートや芸能や、そして死者も、混在させているカトリック教会というのは、ものすごい磁場を生み出しています。私などは、こういうところに魅力を感じてしまうのですが、いかがでしょうか。

加藤 初期キリスト教と言いますか、ローマの国教としてキリスト教が公認されるまでのキリスト者の扱われ方は、日の当たらない場所に生活していたまさに日陰者であったということがよく指摘されます。カトリックの本山であるローマのサンピエトロ教会に行きますと、地下に歴代の法王のミイラが置いてあり、一大観光施設になっています。非キリスト社会の者からしますと「気持ち悪い」ということになりますが、時たま信者の方が拜んでおられるのを垣間見ておると、素晴らしい経験をしたという面持ちでミイラと対面し、もう死んでもいいというような感動をされています。その様子を見て、感動を持ってない自分を寂しく思ったこともあります。

そもそも教会は神の家ということがあります。そこに各都市の守護聖人が祭られていて、床板の一枚下に聖者が眠っているのです。ただ、火葬の風習がありませんのでミイラとして祀られているわけです。有名な教会の多くは建物を同じ場所に2代、3代と建替えていくという連続性がありますので、おっしゃるように下の方に何かしらおどろおどろしいものがあって、徐々に上に行くにしたがってきれいなものになり、一番上に偉い人、尊い人がおられるという垂直構造になっています。それが都市の中心を貫いています。

5. 「日本の都市は中空構造」だという仮説

釈 垂直構造というお話、よくわかります。ヨーロッパの都市は、教会を中心に放射線状に道が伸びていたり、教会を中心に旧市街が広がっていたりします。それに対して日本の都市の場合は、ご指摘のように、お寺は周辺に配置されています。日本の各地域のほとんどが、そのような形態になっています。

日本でも、古代にさかのぼると、集落の中央が宗教儀礼の場だったり、墓地だったりして、その周囲に住居をもうける環濠集落などになっていたところもあります。中世の寺内町などは、お寺を真ん中にして都市をつくった事例もあります。しかし、日本では地域コミュニティが発達するにつれて、宗教の場を周辺に配置するようになっていきます。つまり真ん中を空洞にするような感じです。河合隼雄先生が日本人のメンタリティや宗教構造を「中空構造」だと指摘していますが、地域のデザインも中軸形成を避けるのかもしれませんが。また、日本の場合、寺院というのは死者と密接ですから、やはり周辺に位置することになるといった事情もあるでしょう。

そもそも、明確な中軸を作ると、正統と異端といったポジショニングをする傾向が強くなりますからね。これに対して、真ん中を空として開けておけば、丸テーブルのように誰もが並列に着けるという形態になりやすい。日本ではそういう方向に地域コミュニティが発達してきたと言えるかもしれません。

6. だんじり祭りの中の宗教儀礼と人間関係秩序

釈 神道というのは「死」に関することを避ける性質をもっています。ですから、だんじりでも「死」をイメージする要素は排除するようになっていないのですか？

江 逆ですね。安全祈願祭というのが8月にあります。だんじりで亡くなった方を祀る物故者慰霊祭は大正時代からやられています。これはお寺でやっています。一つ間違うと死んでしまうという危険な祭りなので、亡くなった方の霊を、きれいに鎮めていくということがあります。安全祈願祭は20年ぐらいの歴史です。

また、これはいつからやっているのか分からないのですが、うちの町では盆明けのつぎの日曜日に犬鳴山に護摩を焚いてもらいに行きます。参加者は各団体の責任者に加えて、前てこ係と屋根乗りのいわゆる危険パートの担当で、焚いてもらった護摩を持ち帰ってお守りのバッチの中に入れて祭りに参加することになります。これは神事というよりもみんなピクニック気分で行きます。

釈 なるほど、そうなんです。それらは仏教や神道といった体系化した宗教ではなくて、地域の宗教儀礼の性格が強いと思われま。

江 修験道の人たちが法螺を吹いているのを見て、「大ボラ吹いてるなあ」と言っ

釈 修験道も混在しているのです。だんじりは船の形態をしているので、やはり海民系のお祭りだと思われま。以前お話を聞いたときに、「海民系の地域は敬語が発達しない」とおっしゃっていました。これはすごく興味深いことだと思います。つまり海民系の文化は横並びの意識がとても強いということです。けれども、長老から若者にいたるまで、全員の秩序がなければだんじりは動かない。先ほどキリスト教文化圏の垂直構造のお話がありましたが、横並びの気質の地域の特性と、その気質の中に厳しい縦秩序がある。ヨコとタテが交錯していますね。

江 複雑ですね。長幼の序は厳しいです。例えば、私が曳航責任者で、青年団の二十歳ぐらいの子が道ですれ違うときに挨拶をしないようなことがあれば、いきなり「青年団長を呼んでこい」となって、「なつとらへん。そんなんやったら怪我するぞ」と説教になります。要するにだんじりは団体でやることなのであって、息を合わせることが大切だということです。

高田 お祭りというのは神事です。それに対して漁業というのは俗の世界です。そういう聖と俗の間に正反対、ないしは少しずれた構造が出てくるということは少なくありません。例えばバリ島の人々は農業民なのですが、ときに激しい水争いが起こります。だから、真ん中に川が流れているようなところでコミュニティを2つに割ってしまうと具合が悪い。そこで、お祭りをやるときは、生業の方の生産組織のグループとは全く違った組み合わせでグループを形成します。お祭りをやるためには、水争いの敵方と一緒にやらないといけない構造をつくることで問題を丸く収める。つまり、聖なる世界と俗なる世界とをちょっとずらせて近接させる。

これを漁師世界に移し替えると、海に出たら若いもんも、年いったもんも、平らではあるのですが、お祭りの際には、きちんとした秩序に順応させる。平らな世界は、平らだけではうまくいかないの、どこかに縦型の秩序が必要になるといことなのではないでしょうか。

江 おっしゃる通りです。岸和田にはまだ漁師がいますが、漁業は「板子一枚下は地獄」です。だから、網元と店子とは契約がありますが、海に出ますと横並びになります。しかし祭りは1歳違うだけでも上下の関係を大切にします。

7. 岸和田だんじり祭りの集客の歴史

釈 だんじりは河内にも貝塚にもありますし、平野にもあります。尼崎にもあります。ですが、65万人の人が集まるのは岸和田だけです。岸和田のだんじりには突出した魅力があるのでしょうか。岸和田でこんなに見物客が増えたのはそんなに昔からということではないように思いますが……。

江 そんなことはありません。岸和田は城下町です。そういうことも関係しています。「こなから坂」という坂を上がって宮入をするのですが、それはお城入りでもあるのです。宮入りとお城入りがうまいことダブっています。そこがほかの地域のだんじり祭りと違うところです。祭りのクライマックスではお城の大手門から入って行くことになっていますが、これは、城主の岡部公が年に一回は無礼講で入ってこいということで、三の丸の稲荷神社にまで入って行くことが許されたという歴史に、その起源があります。それをみんなが見に来るわけです。また、泉州地方のだんじり祭りは、岸和田と春木以外は10月に行われます。その10月の祭りの地域の人たちが岸和田のだんじりを見に来ることになります。岸和田のだんじりは迫力があって綺麗だということがあります。そういうことで多くの人が集まって来るのだと思います。

釈 城下町という土地柄と祭りの時期ということが、岸和田に人が集まる原因なのですね。ありがとうございました。

8. 神社とお寺——神仏習合と神仏分離

釈 ではハンジさんにお伺いします。お寺が出てくる漫画のコスプレをして、みんなでお寺に行くんですか？

ハンジ コスプレはゴシックの格好でやったり、色んなキャラクターだったりします。

釈 お寺関係の漫画で、コスプレが成り立ちそうな漫画って、どんなものがありますか？

ハンジ 先ほど山伏と言いましたが、山伏が出てくる少女漫画があります。『町でうわさの天狗の子』という漫画ですが、ご存じですか。これまで山伏はあまり知られていなかったのですが、この漫画で知られるようになりました。私の家の近所でも山伏の方が法螺を持って近所を歩いておられるので、それを見ていると、私も山伏の格好をして歩いてみたいと思います。

高田 いま、山伏の話が出てきました。これは、仏教や神道に比べると、修験道というやや異質なものです。その点でいうと、岸和田のお祭りのベースは神社にあるのだと思います。

ところで日本中に、お寺は8万軒、神社も8万軒あります。コンビニは4万軒ぐらいですから、寺も神社も、コンビニより多い。で、コンビニの場合はよく分かるのですが、これらの寺や神社の関係者は、どうして生活を成り立たせておられるのか。不思議と言えば不思議なことだと思います。

そのお寺と神社ですが、神仏習合ということで、もともとは隣同士にある場合が非常に多かった。ですが、最近はどうなんでしょうか。お互い、仲がいいのか悪いのか。

まあ、それはいいとして、リョウさんは神社の方にご興味はないのでしょうか。

ハンジ 実は私は神社とお寺の区別があまりついていなくて、赤い鳥居があれば神社というぐらいで、あまりはっきりとした区別が分かっていません。

高田 そういうことを耳にしますと、年寄りなどからは「神社と寺の区別も付かんのか」という批判的な言辞が返って来そうですが、果たしてそうなのか。ハンジさんは今、たいへんいいことをおっしゃったように思います。神仏習合の日本では、もともと寺と神社は仲が良かったのですが、幕末に神仏分離、廃仏毀釈という動きが出てきて、仏教が排斥されるんですね。たぶん動機の一つには、欧米の一神教のマネをしようと考えたということがありそうに思えるのですが、釈さんは神社とお寺の関係をどのようにお考えですか。

釈 宗教の性格がだいぶ違います。神道はもともと地域コミュニティを維持するための宗教です。いわば地域の人々のバインドの機能をもった宗教です。そして、常に白紙へと還元する、ニュートラル状態へと戻すという原理をもっています。いわゆる「水に流す」といった原理です。これに対して、仏教の方は個人が悟りや救いを目指す宗教です。神道と仏教はそもそも宗教のタイプが違う。

日本へ仏教がやってくることで、仏教を触媒として神道の体系が形成されていきました。したがって、もともとは双方があまり分離していなかったんですね。ですから仏教と神道、お寺と神社とが、相互に支え合っている部分はかなりあります。

ただ、浄土真宗のように神道と明確に区別しようというタイプの宗派もあります。江戸時代後期のように、できるだけ仏教色を排除しようとする神道もあります。神仏習合が本来の形態であると主張する人も多いですが、全部が神仏習合でやってきたということではありません。

9. ヨーロッパの土着宗教とキリスト教

高田 なるほど、そういうことですか。その上で、さきほどの加藤さんの話に戻ります。地下に死骸を埋めるだけではなくて、教会内部の壁に棚があって、どくろが並んでいるようなところもあります。ああいうのはキリスト教的なものなのか、それともヨーロッパに昔からあった習俗なのか。このあたり、加藤さんのご専門ではないのですがどうなのでしょう。

そういえば12月25日はクリスマスですね。でも、キリストの生まれた日が12月25日であるということは、『聖書』のどこにも書いてない。クリスマスは、ヨーロッパの人々の土着宗教における冬至祭とキリスト教が習合したものなんですよ？ 夜の長い冬が終わって、少しずつ昼が長くなる、その瞬間に春の訪れを予祝して、どんちゃん騒ぎをしたわけです。そういう土着宗教の行事と新たに入ってきたキリスト教とが、激しい喧嘩をせずに仲良くするために、一種の妥協策として浮上してきたのがクリスマスだということになると思います。

まあ、それはいいとして、教会にどくろを並べたりするのは、土着の習俗か、それともキリスト教の神学に根ざしているのか、どちらなのでしょう。あ、そういえばプロテスタントには、そういう習俗はなさそうですね。

加藤 私はキリスト者ではありませんので、その立場でもの申すのもどうかとは思いますが、いまおっしゃったように、ヨーロッパでキリスト教が広がっていく中で常に正統と異端の問題が横たわっています。原始信仰のようなものをキリスト教は全部破壊していきますし、一神教の力で改宗させる。改宗しない者は異端だということで宗教裁判にかけて火あぶりにするというようなことでした。

ヨーロッパにはもともと日本的な天国と地獄という考え方があったように思います。バチカン美術館のミケランジェロが描いた「最後の審判」なんかも、上に上がれそうで下に落ちていく人たちが描かれていて、3分の2以上が下に落ちていく顔です。その顔はどくろのような、苦しまぎれの無残な形に描かれています。生のどくろが並んでいるのはその多くは地下だろうと思いますが、どくろになっているのは異端で、改宗しないとどくろになるということを言っているという解釈もあると思います。

高田 ダンテの『神曲』などを読みますと、天国があって地獄があって、その間に煉獄といういい加減なものがあって、死んでから改宗してまじめに信仰すると天国に行けるという話があります。日本でも地獄という観念が成立するのは、源信の『往生要集』あたりからなのだろうと思いますが、釈さん、いかがですか。

10. 死後世界の文化を生み出した仏教

釈 『往生要集』の影響はかなり大きかったとは言われています。

とにかく、庶民の間に地獄や極楽のイメージが強くなるのは平安末期からですから、だいたいその時期に仏教的な来世観が拡大したといったところでしょうか。

それ以前、もともとの日本人の来世観や死後の理念というのは、あまり豊かなものではなかったようです。どちらかという、ひたすら恐れる、見ないようにする、隠すという傾向が強かったと言われています。そこに、仏教の来世観や生命観が大きな影響を与えた。少なくとも、仏教の影響で日本人が死と向き合うようになったり、死の文化が豊かになったのは確かでしょう。

柳田國男は仏教がすごく嫌いで、仏教の悪口ばかり書いていますが、その柳田國男でも認めざるを得なかったのは、「仏教によって日本人の死生観や死の文化がすごく発達した」ことです。

高田 平安時代末期といえ、古代社会が解体していく過程で、非常に具合の悪い問題が多発して、地上に地獄絵が展開された時代です。それ以前は人々の多くが農村地帯に住んでいて、それなりに食えたわけですが、平安京という都市が発展して、都市に出て行くと食えると思って行ったら、そこには実は地獄絵が展開していた。鴨川の河原には、随所に死骸が捨てられているわ、それを犬が食べているわ、そういう風景が『往生要集』を書いた源信のイメージの中に投影されたのかなという気がします。

11. 日本のコミュニティの誕生と仏教

釈 あり得ることだと思います。大きな震災もあったようです。この前の東日本大震災の震度は、平安中期から末ぐらいに起こった地震以来の大きさだと言いますから。

だから、日常はもろいとか、現実にはかないとか、そんな感性をリアルに共有した時期なのでしょう。それと同時に、大きく社会のあり様も変化した時代でもあります。平安中期以前の日本では、地域コミュニティがあまり発達していなかったようです。荘園制度などにはありましたが、各地域の自治能力などは未成熟だった。だから、簡単に離合や逃散なども起こる。しかし、平安末から中世にかけて、地域コミュニティが発達し始めました。その際、地域コミュニティの核となったのが、草の根型の仏教宗派です。浄土真宗などはかなり活躍しました。

12. イタリアの地方都市に定着する若者たち

高 田 なるほど、そうした日本の地域コミュニティが、明治以降は近代化の波に出会うことで徐々に解体を始め、多くの人々が都会に出てくるようになりました。都市に出たら食えたからです。そうした趨勢が高度成長期に極限まで加速し、1980年代まで持続するのですが、1990年前後にバブルが崩壊したことで、大都会に出ても仕事がなくなった。で、多数の、主として若者が失業者にならざるをえないという非常に困った時代がやってきているわけです。

そうした日本の状況に比べると、イタリアも若年失業者は少ないのですが、その一方で地方都市に目を向けると、結構元気なように見えます。そうした街に暮らしている若者などは、余りローマに行きたいなんてことは考えないのじゃないでしょうか。

加 藤 おっしゃる通りです。最近イタリアでは、スローシティが一種のファッションになっています。これはスローフードから来ている言葉です。スローシティの要件は4つぐらいあって、その中の一つに「合理的に過ぎず、急がない」ということがあります。そして、農業や一次産業で楽しく暮らしながら、観光を中心としたサービス産業を展開するわけです。このような小さな都市へのインバウンド観光（外から来てもらう観光）やアグリツーリズムが非常に盛んになっています。スローシティは人口3万人以下ということになっていますので、だいたい5千人から3万人ぐらいの小さな町ですが、スローシティの間にはネットワークがつくられていて、皆たいへん元気です。そこでもてはやされているのは民宿的な宿であり、グリーンツーリズムであり、地域の食材を使ったおいしくて素朴な「素飯」であり、しかもそれをマネジメントしているのがUターンしてきた若い人たちということで、そのような人たちの受け皿にもなっています。このように地方は元気ですが、ただし、地方とは言っても日本の村のような集落ではなく、教会があって市場があってちゃんと都市的な商業が展開しているような村ですので、都市と言ってもいいと思います。イタリアの地方はそういう状況です。

高 田 なるほど、よくわかりました。イタリアでは、地方の小さなコミュニティが自律的に動いていく上で、宗教施設というか、カトリック教会の果たしている役割が非常に大きいんですね。しかも社会福祉的な助け合いの中心にもなり得るような力を持ち続けてきました。「日本の村と違って……」とおっしゃったんですが、日本の村にも大体、お寺や神社があるでしょ？ にもかかわらず、何でもみな東京に行きたがるのでしょうかねえ。

13. 高度経済成長と日本の地域コミュニティ崩壊

釈 濃密な地域コミュニティというのは、かなり煩わしいものですからね。地域コミュニティの中で仲間外れにされず暮らしていくって大変ですよ。それでも、そうしないと仕事もないし暮らしていけないから辛抱するわけです。でも、都市というのは、そういう煩わしさが無い。だから、一時期、人は都市へ都市へと流動しました。また、それにつれて地域コミュニティが崩れていきました。

もちろん、この傾向に拍車をかけたのは、経済システムや移動手段などの変化です。たとえば、今でも新幹線が走っていないところには、それなりに地域コミュニティが残っていたりしますからね。ある地点とある地点を高速移動手段でつなげてしまうと、あっという間にその途中の地域コミュニティが壊れたりします。

つまり、現在のように地域コミュニティを頼らずに暮らしていける社会（つまり、地域コミュニティの崩壊）は、我々が望んだ選択の結果です。地縁血縁の煩わしさをなしに、かつ平等に暮らすことができる社会を目指したのです。地縁血縁社会は、つねに互いにコミュニケーションを維持し、相互にケアしていないと排除されてしまいます。そんなことをしなくてもフェアに扱ってもらえる社会を我々は目指してきました。しかし、ここに来て、孤独死とか老老介護とか、地域コミュニティがなければなかなか解決しない問題が浮上してきました。かつてコミュニティが支えていたものが必要となってきた。望んだ社会に到達してみると、それはそれで意外に問題が山積みである、そんな状況ではないかと思います。

高田 「都市の空気は自由にする」という有名な言葉があります。それに導かれて、多くの人が都市に出ていった。そして近代社会が出来上がった。ところが、その結果、今度は「自由の刑に処せらる」という皮肉な状況が現出しているのでしょうか。

ところで、最近の京都の都心のマンションには、東京でリタイアした人たちがたくさん引っ越してきて住みついていますね。そうした人々のなかには、「祇園祭の氏子になりたい」という人が少なくないんだそうです。祇園祭は何度も見に来たけれど、今度はやる側に立ちたい、ということのようです。リタイア後のご老人ですから、役に立つのかどうかは分かりませんが、ちゃんと寄付金も出されるので、「ま、ええか」ということになっているようです。このように長い期間住みつくといいのも、観光の新しい形なのかも知れません。そこで岸和田ですが、他所から来て岸和田のだんじりに参加したいというような若い人はいませんか。

江 去年、テレビのドキュメンタリーで取り上げていましたが、大阪市内に住んでいた人が浜の町の青年団に入って、これはすごくいい地域コミュニティだということに住みついたという例がありました。

私は長いこと雑誌の編集をしまして、海外の取材もしてきました。色々なまちを見てきましたが、日本では東京以外はみな地方だと思っています。京都の人にも地方の人と言ったりします。こういうことは日本だけだと思います。

先ほど地域コミュニティの話が出ていましたが、コミュニティは本質的には迷惑のかけ合いだと思います。そこを耳障りのいい「コミュニティ」と言ってしまうのです。一時期人がまち（都会）に向かったのは、まちはお金さえあれば何でも消費できるということが約束されているので、匿名になってまちに出て行った。日本では円高やプラザ合意によって一気に消費社会が進み、また私がやっていたような情報誌なども消費をあおりました。要するに「岸和田ではルイ・ヴィトンが売ってないけど東京に行ったら売ってるやん」ということです。そのようなことで都会に出て行ったということが岸和田にいますと実感として分ります。

14. 仏教とお茶——日本と韓国の比較を踏まえて

高田 ハンジリョウさんのお生まれは京都ですか。

ハンジ 生まれは大阪ですが、育ちは福井です。その福井から京都に来ました。

高田 福井から京都に出てこられたときに、京都の何が面白そうだと思われましたか。お寺が居酒屋みたいということだけではなかったと思いますが。

ハンジ 私の場合は京都のお菓子が好きでしたので、お菓子を全部食べようと思って来ました。それで実際、かなり食べました。

高田 お菓子というとお茶ですね。神社は、お酒と相性がよろしいようですが、お寺さんはお茶です。仏事では必ずお茶が出てきて、同時にお菓子が出てくる。釈さん、お茶についてお寺が果たした役割というのはどういうものなんですか。

釈 お茶はけっこう最先端の文化として導入されましたし、修行のツールとしても使いました。仏教は、医療や薬学の知識も一緒に持ってきましたので、お茶はいろんな場面で活用することになりました。しかし、そのお茶が、一つの「道」になるまで昇華してしまったところが面白いと思います。

日本のお茶の道やお花の道は、けっこう独特の発達をしています。たとえば、お作法には、本式的な「真」の形があって、少し崩した「行」の形があり、かなり崩した「草」があります。ちょうど漢字の行書、草書みたいなものです。そして日本では、作法をしているかどうか分からないぐらいに自然に振る舞う「草」が最も価値があるということになりました。いかにも作法していますという態度で相手に気を使わせるのではなく、ごく普通に何も無いように振る舞うのが最高だというように、高い思想性を持っています。これは大きな特徴です。

高田 お茶を日本人の間に普及させたのは、鎌倉時代の禅宗のお坊さんですね。たと

えば『沙石集』の中に非常に面白い話がある。お坊さんが農民の前で説教するんです。

「お茶ちゅうのはありがたいもんや。それには3つの功德がある。まず、これを飲むと眠くならない。2つ目の功德は、たくさんご飯を食べても、こなれがええので胃もたれを起こすことがない。そして3つ目。セックスがしたくなくなる」
そんな話を聞いた農民の反応が非常に面白い。

「なーんや、お茶というのは、わしらの楽しみをみんな無くしてしまうもんなんや」
ま、そういうこともあって、すぐには庶民の間に普及しなかった。

ただ、仏教とお茶とは非常に深い関わりがあって、そのことが日本人の暮らしにお茶が深く入り込んだ理由のひとつでしょう。それに比べると韓国などでは、10年ぐらい前まで余りお茶を飲む習慣がありませんでした。というのも、韓国は儒教の国でしょ？ だから、儒教に押されて、仏教の寺はだいたい山の方に追いやられてきた。それが最近、健康ブームだというので、お茶が普及し始めた。いずれにしろ、お茶と仏教の間には非常に深い関係がありますね。

15. 巡礼をめぐる日本とヨーロッパの比較文化

高田 さて、今日のテーマは「旅と宗教と観光の関係」です。が、このテーマと切っても切れない巡礼の話が、まだ出ていません。最近では若い人の四国八十八か所巡りなども増えているようです。就職が決まった段階で巡礼を始めたりするんですね。日本の場合、巡礼は仏教から始まったのでしょうか。

釈 日本の巡礼は、西国の観音巡礼が最初期の原型であると言われていています。その後、四国、関東というように展開していきました。

日本でも初期のころは、地形に沿って順番に訪れるというような世界の多くの国にあるタイプの巡礼でした。しかし、どういうわけか、ぐるぐる回る独特の形態へと展開するようになっていきました。世界の聖地巡礼は、ほとんどが聖地に行くまでの道筋に様々な物語があるとか、ここに行った後にはここへ行くというような形態になっています。日本の場合も初期はそうだったのですが、いつの間にかどこから始まってもいいしどこで終わってもいいという独特の巡礼が形成されたのは興味深いところです。

また、仏教の習慣として「数字にちなむ」というのがあります。観音菩薩は三十三の顔を持っているというので三十三ヶ所をお参りする、といったようなことです。菩薩までのプロセスが五十三段階あるので、東海道五十三次にするとか。

高田 巡礼はヨーロッパでも行なわれます。ただ、ヨーロッパの場合は、ぐるぐる回るよりは一直線に目的地をめざし、それを達成すると真っ直ぐ帰ってくる。そう

いうイメージがあるのですが……。

加藤 聖地巡礼と言えば、スペインのサンチャゴ・デ・コンポステーラをめざすのが有名です。でも、キリスト教世界でのもともとの聖地巡礼の目的地はエルサレムだった。で、その聖地の近くには小規模な形の巡礼ルートがありました。どのように回ったかは詳しくは分かりませんが、山があったり川があったりするところを回るルートが設けられていたようです。キリスト教が広まった中世以降には、例えば北欧や中欧などにも疑似的なエルサレムのルートが設けられました。これは、日本の奥の宮、一の宮、二の宮、三の宮といった制度とほとんど同じです。ある圏内に行けば聖地巡りと同じことになるというので、いくつかのキリスト教会を回ります。例えばポーランドにはたくさんのルートができていますが、そこを回ればエルサレムを回ったことになるというような巡礼ルートがヨーロッパにはいくつかあって、それと似た性格を持っているのがコンポステーラへのルートだと思います。その中には四国の八十八か所巡りで地元の人がお接待をするのと同じような思想があります。同じキリスト教者であるというだけで、安く泊めてあげるとか、野垂れ死にしないように世話をするとか、神様のもとに行く人々を地元の人が接待をする。世界的に似ているなという感じがします。

高田 ポーランドは確かカトリックですね。それに対して、プロテスタントの国にもそのような習慣があるのですか。

加藤 プロテスタントにはありません。そもそも聖書主義ですので別に教会に行かなくても救われる道は他にあり得るということです。

高田 そういえば16世紀の宗教改革以降、巡礼は衰えていったのですが、19世紀の後半に「ルルドの泉」（フランス南西部オート＝ピレネ県）の奇跡の話が広まって、以後、あらためて盛んになり始めた。なんでもマリアの姿を見た足なえの女性の足が治ったんだそうです。これがきっかけになってヨーロッパでまた巡礼が行われるようになりました。で、コンポステーラでは、最近5年ぐらいの間に、客を迎えるための大規模な改修工事をするほど巡礼が盛んになっています。

といったところで、会場の皆さんのご質問やご意見を伺おうと思います。

まずは来年の年次大会を開催することになっている豊後大野市の方に、ご当地における名刹の話など提供いただければありがたいのですが……。

フロアー参加者 豊後大野市から参りました豊田と申します。古刹の部類に入る天台系のお寺が3つあります。しかし、現在は力が弱くなって経営が苦しいという状況です。

高田 なるほど……。むしろ神は原風景的な大野市の自然の中に宿っていると考えたほうがいいのかも知れません。他に会場の皆さん、ご質問や意見、コメントなどがありましたらご発言をお願いします。

16. 宗教と作法と儀礼——「泣き笑い」行動の意味

フロアー参加者 京都外国大学の非常勤講師で古畑と申します。午前中の積先生のお話で、ニーチェの影響を受けた悲劇ということが出てきましたが、大阪に住んでいる者は悲しいことが嫌いです。はっきり言うと、いつも笑っていたい。日本語で言う喜劇と悲劇とはどう違うのか。吉本新喜劇を見ていると、あんまり悲しくなると笑うしかないということが分ります。日本語ではよく泣き笑いという言葉を使うことがあります。泣き笑いといった複合的な言葉はヨーロッパ言語にはなく、泣くか笑うかどっちかにせえやということになります。日本の場合はあんまり悲しいと、へらへら笑っているしかないというような日本人とその宗教性はということなのかということをお聞きしたいということがまず一つです。

二つ目は、1582年に明智光秀は織田信長に殺されてしまいますが、明智光秀には、宗教とは結局作法と儀礼であるという考え方があったのだと最近、ある研究者が言っています。そうすると、今日の午前中の話からしますと、宗教を考えると、日本人の場合は難しいことから考えるよりも作法から考えた方がいいのか、あるいは作法こそ宗教なのか、作法がなければただの哲学なのか、ということをお教え頂ければと思います。

高田 イタリア人は、泣き笑いをするのでしょうか。

加藤 しないと思います。言葉としてどういう表現になるのかと考えても、思い浮かびません。仏像も泣いている顔と笑っている顔ははっきり分けられていて、日本の能面や菩薩のようなどっちにも受け取られるような彫刻はありません。

積 大阪という土地は、たくさんのが流れ着いて吹き溜まりのようになっていきます。だから、一人の人が色んなコミュニティに重層的に所属する都市になりました。そういうところでは、一つのものにギュッと「凝縮」するとあまり具合がよくない。ひとつの原理が強くなると、排除が起こりますからね。だから、大阪という都市には「拡散」する機能が必要なのです。大阪というところは、凝縮を脱線させることを大切にしてきました。そして「拡散」「脱線」を起こすもつとも有効なものは「笑い」です。

ついでに言いますと、宗教というのはどうしてもギュッと濃縮する方向に動きます。だから、成熟した宗教文化には「宗教を笑う」といった部分が発達します。ユダヤ教なんかでもかなりジョークが発達しています。また、日本仏教も笑いの部分が成熟していると言えます。

つまり宗教が濃縮する方向にいくのを拡散するために、宗教と芸能やアートの組み合わせがとても大切であると思います。

また、「泣く」ことも情動の拡散ですから、笑いと非常に近接している反応であるように思います。

高田 そういえば我々も、とことん困ったときには、「笑ろうてな、しゃないな」などと言いますね。

積 事態が行き詰まったときは、どこかで話をガクッと脱臼させないとダメですからね。それは一種のコミュニケーション技法でもあります。宗教で言いますと、ある信仰とある信仰がどちらもギュッと収縮してしまうと、衝突が起こります。それを、ガクッと外して拡散するという技術。これは大阪という都市には必要な技術だったのではないのでしょうか。なにしろいろいろなものが流れ着いて来る場なんですから。

高田 お寺でお坊さんの話を聞きますと、必ずどこかで笑わしてくれます。『醒睡笑』^{せいすいしょう}という落語のもとになった話を集めた本も、京都の浄土宗のお寺でできたようです。

積 笑わせないといけないというわけではありませんが（笑）。

『醒睡笑』を書いたのは浄土宗のお坊さんの安楽庵策伝という人です。また、先ほど出ました『沙石集』も無住というお坊さんが書いたものです。どちらの著述も、人前でしゃべっていたのを元にして出来上がっていると思われれます。おそらくこの人たちは普段からいろんなお話をしていたのでしょう。ジョークや小咄をして笑わせ、リラックスさせて、注意をひきつけて、ここというところで仏教の話へと着地させる。これを「合法」^{がっぽう}と言います。日本ではお説教がすごく発達し、たくさんの技法や構成方法が工夫されてきました。そして、その中からいろんな語り芸能も生まれてきました。

お説教では、笑わせたり、泣かせたりして、仏法が説かれます。ただ、仏教が目指すところは、快にも不快にも支配されない境地です。ずいぶん非人間的な話ですが、それを目指します。

さて、もう一つのご質問の「宗教における作法と儀礼」という点ですね。ご存知かもしれませんが、マックス・ウエーバーという社会学者が、「宗教の本質は行為様式だ」といったことを語っています。ユダヤ民族はユダヤ教の行為様式を実践している限り、どこで暮らしてもユダヤ民族であり続けることができます。ユダヤ教を見ていると、まさに行為様式こそ宗教の本質である、といった感もあります。同様に、各地域の行為様式の中にその地域の宗教性がある場合も少なくありません。

私は、日本人は「戒律嫌いの儀礼好き」だという気がします。戒律はあまり大きく展開しないけれど、作法や儀礼に関してはすごく成熟していきます。ですか

ら明智光秀が、宗教は作法と儀礼だと言ったのなら、いいところを突いているかもしれません。

ただ、日本の宗教の儀礼好きというのは、「場を感じる宗教性」という面が強いからだと思います。儀礼が行われているその場に自分をシンクロさせるというタイプの宗教性が得意です。ですから、教会に行けば教会の静謐さに胸を打たれてそれらしい振る舞いふるまいをしますし、お寺の本堂に行けば本堂に何とも言えない良さを感じたりします。儀礼というのは「信仰や思想よりも関係性が先立つ」という特性を持っていますので、自分の信仰とは違う儀礼の場所に行っても、それらしい振る舞いをするということになります。つまりこの「関係性」に、日本的宗教の特性の基盤がありそうです。

宗教によっては、ほとんど儀礼を行うだけ、というタイプもあります。その反面、儀礼は体系内の一要素であるといった宗教のタイプもあるんです。

儀礼は宗教における大きな要素であることは間違いありません。だから、作法や儀礼を除外すればまるで哲学になってしまう宗教もあると思います。ただ、宗教ならではの特性は儀礼以外にもあります。たとえば、教団であったり、神であったり、来世や前世であったり。そのような宗教の主たる構成要素を見る限り、作法や儀礼だけですべての宗教を言い尽くすことはできません。

そもそも宗教を定義するって、かなり困難です。「宗教の定義は宗教学者の数だけある」と言われるぐらいです。

17. 形と心——東京ディズニーリゾートの事例から

高田 いまの話は「形と心」という話題に一般化できそうです。例えば、アメリカからやってきた東京ディズニーリゾートで働く男女アルバイトのホスピタリティは、本国以上に優れているといわれます。それは心の持ち方を変えさせる前に、行動の仕方という「形」から入るからのようです。

アルバイトの若者に子供が何かを質問したりしたら、彼らは必ず跪いて、つまりは子供と同じ視線にまで腰を落として対応するよう、マニュアルで教えられます。子供は、背の高い大人から見下げられると、一種の恐怖を感じるのですが、視線の高さが同じになると、同じ子供の仲間だと思う。それで、子供たちはお兄ちゃんお姉ちゃんに懐く。懐かれると、若者のほうも気分がいいですから、いよいよ子供たちに親切かつ優しく対応できるようになる。そういう姿を見た子供の両親も、ちょっといい気分になれる。形から入ることで、気持ちの上でも、みんながハッピーになるというわけです。

さてそこで、ハンジリョウさん。お寺に行くと、そのたたずまいの中で気分が

変わるというようなことをおっしゃったんですが、どうでしょうか。

ハンジ お寺に行く心が清まるというわけではないのですが、何となく少しいいことをしているようなそんな感じになります。

高田 多分ハンジさんは元来、穏やかな心根の方だという印象を勝手に持っているんですが、もっと優しくなれるのでしょうか。

他に会場からのご質問、いかがでしょうか。

18. 京都の地蔵盆と地域コミュニティ

フロアー参加者 大阪で出版社をやっている中島と申します。私は阪神間に住んでいますが、うちのマンションの斜め向かいにお地蔵さんがいらっしゃいます。最近お地蔵さんの前を通るたびに、お地蔵さんを拝むようにしています。近所には他にもお地蔵さんがいますので、お地蔵さんに関心を持つようになりました。また、たまたまご縁がありまして大阪府の八尾市で仕事をしていますが、八尾には、13世紀ごろのお地蔵さんがまちの中に祀られていて、その数も八尾のお地蔵さんを巡るだけで1年365日かかるのではないかとというぐらいたくさんあります。

そこでまず、ハンジさんにお伺いしたいのは、ハンジさんの「京都観光生活」という漫画の中に北向き地蔵の話があって、京都では地蔵盆がえらく盛り上がっているということが描かれています。地元のおじいちゃんやおばあちゃんだけではなく、若いお母さんたちが子どもたちを連れてきてたいへん賑わうようですが、そのようなことは京都では普通に行われている風物なののでしょうか。これが最初の質問です。もう一つは釈さんにお伺いしたいのですが、釈さんの奥さんのご出身は八尾だとお聞きしましたが、八尾でも地蔵盆は盛んにやられているのでしょうか。

ハンジ 京都で一番、地元に着したお祭りは地蔵盆です。私の町内にも北向き地蔵さんがいますが、1年が地蔵盆に集結しているという感じですね。先ほど江さんから、だんじり祭りの役員になると仕事も私生活もズタズタになるぐらいすごく忙しくなるという話がありました。それに近いものがあります。たいてい地蔵盆はお盆が終わった週末に行われます。そのために夏があるというぐらいの時間と精神力を掛けて挑むものです。

高田 ついでに言うておきますと、私の育った町では地蔵盆ではなくて、大日如来を祀る行事がありました。みな「大日つつあん」と呼ぶのですが、8月24日前後の地蔵盆より3、4日あとに行なわれていたように思います。子どもが集まってくじ引きをしたり、数珠まわしをしたりします。ハンジさんが住んでおられる近所には、お子さんがたくさんいらっしゃるのだらうと思いますが、最近はお盆が少なくなって、地蔵盆が廃れているところもあります。それでもまだ京都では非常に盛んですね。

釈 京都はほんとに地藏盆が盛んなところですよ。これに対して大阪の地藏盆は急速になくなっていく状況です。八尾も年々なくなりつつあります。これは、子どもの減少だけが理由ではないと思います。大阪でも、上の子が下の子の面倒みるといった昔ながらの地域コミュニティが残っているのは、天満や岸和田といったお祭りが熱心なところばかりです。

日本のお地藏さんは、なかなかおもしろい信仰なんです。「塞の神」という境界線上の神、仏教の「地藏菩薩」と、中国の「道祖神」という道の神さま、これらが習合してできた信仰形態です。つまり、コミュニティの境界線が崩れていくようなところでは、境界線上の信仰すなわち地藏盆は次第に廃れていくようです。地藏盆がなくなっていくのは、単に子どもが少なくなったということだけではなくて、地域のあり方と密接な関係があります。京都はコミュニティ単位の区割が長い間生きていて、それが地藏盆を担保しているのではないかと思います。

江 南海電車の岸和田駅のつぎに蛸地藏という駅があります。蛸地藏は、岸和田南町の天性寺に祀られている地藏のようですが、ここの地藏盆は屋台が出たりしてお祭りのように盛大です。この地藏さんの縁起は面白くて、岸和田城に根来衆が攻めてきたときに大ダコが出てきてそれをやっつけたということです。蛸地藏の商店街の看板は、「たこじろう」という蛸地藏を模した看板で統一してあります。例えば筆筒屋さんだと筆筒を造っている「たこじろう」、パン屋さんだとパンを焼いている「たこじろう」といったような看板になっていて、それをかなり本気でやっておられるのが面白いと思います。先ほど釈さんが言われたように、地藏盆には、ほんとうに地域性があると思います。

高田 それで思い出しました。政治や行政は宗教に関わってはいけないという「政教分離」の原則がありますね。その結果でしょう、千里ニュータウンや泉北ニュータウンなど、新しいまちでは宗教施設をつくりませんでした。そんな地域で、地藏盆をつくろうやないかという動きが出てきたことがあります。たまたま千里ニュータウンの研究をしておられる太田さんがいらっしやいますので、その話を短く紹介していただけませんか。

太田 千里ニュータウンに住んでる太田と申します。今の話で面白いなと思いましたのは、まちの境界に地藏があるという話です。ただ、千里ニュータウンではまちの中心の近隣センターにお地藏さんをつくっています。ということはセンターに人や子どもを呼ぶといったことを考えたのかなと思います。新しいまちでは地藏を人集めに使ったというようにも考えられます。

加藤 日本のニュータウンの近隣住区は、まちの中心のあんこのところに商店を持ってきてしまいました。これはニュータウンを輸入するときの大きな間違いでした。

近隣住区を最初に考えた人の構想図を見ますと、隣の住区との間に商店街を配置しています。ですから、日本のニュータウンで商店街がまちの中心にあるのは間違いであって、世界の標準的な近隣住区では商店街はまちのへりにあります。市場には昔から神様がいました。日本でも近隣住区を正しく輸入していたら、周辺のところに市場を置き、そこに地藏さんが設けられたかもしれません。

高田 そういう意味では、日本の東京などの繁華街は、もともと都市のはずれにできたものです。ところが、まちが余りに大きくなった結果、あたかも都市の中心にあるように見えるようになってしまった。そう言っているのではないのでしょうか。

カーン カーンです。亀岡で地藏盆をやっているところを見たことがあります。亀岡のカトリック教会のまん前の三角地のようなところに六地藏が集合させられていました。道路は車が通りますので、子どもたちは教会の敷地の中に集まって地藏盆の催しをやっていました。神仏習合以上の面白い現象だと思いました。

19. 「若者の旅離れ」を、どう読み解くか

カーン もう一つは、釈さんの話でリチュアルという中心がしっかりしていると、ナラティブが生まれやすいし継続しやすいという話でした。そこで思い出すのは、最近の若者の旅離れです。それは単に、ITの中でバーチャル旅行ができるからということだけの話なのでしょう。宗教は中心が弱くなっているとは思いますが、何か旅から隔てる別の要因があるのかどうか。釈さんのご意見があればお伺いしたいと思います。

釈 若者の旅離れですか。考えたことがなかったのでよく分りませんが……。

もしかしたら、若い世代は「情報なしに動く」ということが苦手になっているのがひとつあるかもしれません。事前に情報を手に入れてから動く。つまり、マニュアルがないとなかなか動かない。しかし、旅の情報はあまり若い人向きじゃなかったりします。なにしろ今の若者はすごく貧乏なので、あまりマーケットのターゲットになっていないでしょ。そんなところがあるかも。的を射ているかどうか分かりませんが……。

高田 終わりに近くなって、大問題に逢着した感じです。残りわずかな時間のうちに議論できるような話ではありません。ぜひ、ものがたり観光行動学会で、機会を設けて「若者はなぜ旅をしなくなったのか」というテーマで議論したいものだと思います。

ただ、振り返りますと、1970年代、80年代には、お金が無くても、何とかして世界各地の知らないところに行きたいというバックパッカーがいました。しかし、バブルの時代に3泊4日でアジアの都市やリゾートでグルメとショッピング

グだけというバック旅行が急速に広まってしまった。その結果、「あんなことするだけなら、インターネットを見ていた方がええやないか」という気分が広がったようなところがあるように思います。言ってみれば、とくに海外に出て行く旅の品質が非常に低下したのではないのでしょうか。さらに国内旅行についても、ディズニーランド1泊2日ぐらいのお手軽なところにはみんな行くのですが、それ以上はなかなか手が出しにくい。

ところが、その一方で四国八十八ヶ所を回る若者は増えているようです。お金が無くても旅をするという人も少なくないようです。これは面白いテーマになりそうですね。

そういう様々な問題を残した上で、今日の議論について最後に一言ずつお願いします。

20. おわりに——彼岸と此岸のダイナミズム

江 逆に日本に来る人についての話になりますが、西成の新今宮辺りのドヤ街が海外のバックパッカーが来るようなところへ変わってきたのを取材したことがあります。オーストラリアやアジアの人が多いのですが、彼らに聞いて見ますと、どこに行ってもマクドナルドとコンビニだけだけでも、新世界には串カツがあるというのです。グローバリゼーションの中でどこも画一化されていて、外に出て行っても一緒やないかというようなことが、海外の旅行者を取材することで見えてきます。旅行には、いま住んでいる場所とは違うところへ行きたいという動機があるのですが、しかしどこのまちな行ってもコンビニがあり画一的である。どこもユニクロ化、イケア化しているということだと思います。

ハンジ 京都はゲストハウスがすごく増えています。京都観光に来て、そういう宿に泊まる外国や日本の若い人たちは、旅行をするというよりも暮らすように観光をしたいのかなと思います。観光名所を見て回るよりも、生活の一部に入りたいというような観光の仕方へ変わってきているのかなと思います。

釈 ああ、なるほど。どこに行っても同じ景色で同じ文化だと、若者は旅をしないでしょうね。だから観光のあり方が変わってきている。

いずれにしても、そろそろ日本各地の宗教性に目を向けて、みんなで語っていくべき時でしょう。日本のさまざまな地域が持っている宗教性を語る時です。先ほどの高良留美子さんの詩にもありましたように、シャーマンたちがよみがえって、今こそ宗教性について語り、魂の物語を語り始めよ、という姿勢。これが、観光やツーリズムに結びつけば、きっと若い人たちも移動し始めるんじゃないかと、個人的には期待しているのですが。

加藤 今日の話しの中で、日常性と非日常性という二元論的なものがベースに加わって宗教性が非日常の方を担っているということが話の文脈にあったと思います。ところが、若い人を見ていると、日常性、非日常性の境界が全くないと言っていいのではないのでしょうか。すべてが日常性で、もし仮に非日常があるとすれば、それは宇宙のかなたとか大深海といったようにスケールが大きく変わってしまっているのではないか。逆に言うと、ほとんどが日常ですので、宗教的なもの、聖なるものが成り立たない。そういう感じがするのですがいかがでしょうか。

高田 今日の話はずっと一貫していて、最初に会長の白幡さんが観光地にならない場所はない、見方を変えればどこでも観光地になると言われました。それをいま、加藤さんは日常、非日常という言葉で捉え直し、そこに釈さんは宗教性という要素を取り込んで話をまとめられたのだと思います。

その上で、私は少し方向を違えてスポーツに注目してみようと思います。いうまでもなく、スポーツは一種の肉体労働です。だから毎日、肉体労働をしてきたたくなっている人はスポーツを楽しもうなどとは思いません。ところが、近代になって、ものづくりが工場で行なわれることで、余り体を動かさなくてもいい時代がやってきた。そういう時代になって初めて、スポーツへの関心が高まったわけです。

そのことを象徴する面白い話があります。中国がイギリスの植民地だった時代に、あるイギリス人がテニスをしたあと、大汗をかいて帰ってくるんですね。すると、中国人の使用人が、
「ご主人様、そんな汗をかくようなしんどい仕事はクーリー（苦力）にやらせればよろしいのに」

と言ったのだそうです。

スポーツは肉体労働ですから、本来はつらいことです。それがどうして楽しみになるのか。スポーツの語源はラテン語の「デポルターレ (deportare)」にさかのぼります。それは「ある物を別の場所に運び去る」という意味だったようです。つまり、本来はつらいことを、いわば「向こう岸」に運ぶことによって「楽しみ」に変化させたと考えればいいでしょう。それが「スポーツ (sport)」なのです。

「向こう岸」といえば、当然のことながら「彼岸」です。それに対して人は、日常生活を「此岸」で営んでいます。旅とは、その此岸を離れて彼岸に赴き、そこから此岸を眺め返すことなのでしょう。こういう行動というか、心の動きの回路がないがしろにされている現実には、なかなか厳しいものがありそうだという気がします。

ものがたり観光行動学会は、此岸と彼岸を往還することで、既知のことがらの見方を変え、そこに「ものがたり」を生み出すことを試みようと呼びかけていま

す。生活のなかに、そういうものがたりがなければ、豊かな生活は享受できない。それは、いろんな意味での魅力の中心には「リチュアルが不可欠」だという思いにも重なるように思います。

こうしてみると、朝からの話は、大体ぐるっと一周回って完結したと言えるのではないのでしょうか。

ヨーロッパ文明、キリスト教は、単純化して捉え直すと、最後の審判に向かって真っすぐに進んでいきます。しかし、インドで生まれた仏教の背景には、万物が流転循環すると考えるウパニシャッド哲学があります。本日の話の入口と出口が、非常に近接したところに位置したということは、私たちのものの考え方そのものにも、そうした文化の基層のようなものが貫かれているからだと思います。

と申し上げたところで、お開きとさせていただきます。最後までご静聴いただきましてありがとうございました。

重要伝統的建造物群保存地区における 年間イベントを活かした空間利用に関する研究

— 今井町を事例として —

魏 小娥*

Using Spatial Elements to Enhance Annual Events in Districts
with Buildings of Significant Historical and Cultural Value:
The case of Imai-cho, Kashihara-shi

Xiao e WEI

1. はじめに

1.1 研究背景

日本では、1975年の文化財保護法の改正で重要伝統的建造物群保存地区（以下は重伝建地区という）制定以降、1976年に7地区が伝建地区に指定されて以来、2013年5月（現在）104地区が重伝建地区に選定されている。そしてこれらの地区内では建造物・街路を利用し新旧のイベントが展開されている。

例えば、岡山県「倉敷雛めぐり」、大阪府「富田林じないまち雛めぐり」福岡県「筑後吉井おひなさまめぐり」などがみられる。これらの地域では、町家を利用し、個人所有するひな人形や手作り雛などを展示し、来訪者が気軽に地区全体を巡る町並みの観光がみられる。また、祭りの開催を通じ、街路とその周辺を利用しながら、祭礼空間が演出するものもある。例えば、京都祇園祭、小浜本陣祭、などの祭礼空間がみられる。

こうした地区では、イベントや町家の空間利用及びその影響を検討する研究も多くみられる。例えば、増井^{註1}（1994）、碓田・他^{註2,3}（1999）（2006）（2009）、根田^{註4}（2010）、田世^{註5}（2012）などの研究がある。増井（1994）は京都祇園祭を事例として、町空間と祇園祭の関係を分析し、町空間を9つの空間に分類し、祭の演出に重要な役割を果たしているのは、街路空間、建物の前面及び軒下、そして室内であることと明らかにした。また、増井は京都都心コミュニティの変容に伴う祭礼行事の運営形態を変化させたことも明らかにした。碓田・他（1999）は、福井県の小浜放生会の本陣飾りと富山県の城端曳山祭の山宿を事例として、町家が祭りのお飾り場として利用し、祭による町家の空間への影響を検討し、祭を生かしたまちづくりの方向も考察した。また、碓田（2006、2009）はひな祭りと屏風まつりイベントの全国的な開催状況を概観し、その中から事例調査を行い、

* 関西学院大学総合政策研究科

イベント型の伝統行事の空間利用の側面から住民参加型まちづくりとのかかわりを考察した。根田（2010）は伝建地区である今井町を取り上げ、社会実験及びアンケートを実施してイベント型観光の可能性を探った。田世（2012）は古い町並みを有する3つの地方都市における文化的イベントを事例として、地域協同のまちづくりを観察し、相互に比較しながら、イベントが地域協同まちづくりに果たす役割について考察した。田世は①イベントと観光客及びマスコミとの関係、②イベントの主体がイベントを継続させるために必要であることを明らかにした。

1.2 研究目的

前項で述べたように、町家・町並みを活かした観光利用に関する研究は多くみられる。しかし、町家・町並みの利活用手法に着目し、重伝建地区における年間イベント^{注6}を活かした空間利活用手法に関する研究はみられなかった。

そこで、本研究では1993年重伝建地区に選定を受けた今井町を取り上げ、その歴史的建造物群を活かした年間イベントの実態を明らかにするとともに、年間イベントの開催を通じ、利活用の問題点と課題を考察し、今後の重伝建地区における年間イベントを利用する空間を検討する。

2. 研究の方法

2.1 今井町における年間イベントの概要

文献資料から今井町における年間イベントに関する記述を整理し、整理したものを表1で示す。

表1 年間イベントの内容

名 称	開催時期	開始年	主 催 者	備 考
防災フェスティバル	3月第1・日曜	2002年	今井町防災会	
今井町並み散歩	5月第3・土日	1996年	今井町町並み保存会	一部が復活したもの
行者まつり	7月7日	昔から	行者講	既存行事
大神宮	7月16日	昔から	町内会	既存行事
地藏尊	7月23日、24日	昔から	町内会	既存行事
今井灯火会	8月第1・日曜	2008年	今井町町並み保存会	新規イベント
秋祭り・だんじり	10月第3・日曜	1998年	自治会・町内会	復活したもの

今井町では、表1で示したように7つのイベントが開催されている。その中では一度廃止したイベントを再度復活したものもあれば、昔から継続的に行っているイベントもある。

また、開催時期に伴い、イベントの広告紙が町内の数か所で張り出す光景もみられる。

2.2 調査方法

文献調査の結果と合わせて、主催関係者へのヒアリングをしたうえでイベント時の参与観察を行う。ヒアリング調査の対象者は10人（今井町防災会会長・1人、今井町並み保存会会長・1人、NPO法人今井まちなみ再生ネットワーク理事長・1人、副理事長・1人、今井町並み保存住民審議会会長・1人、今井地区自治委員会会長・1人、行政の関係者2人、その他の関係者2人・観光協会の関係者）である。調査は2012年3月から2013年2月までの年間イベントを対象に実施した。

次に、ヒアリングの結果をもとに参与観察を行った。その結果を表2で示した。観察項目は次のような項目である。1、利用する空間（町家、街区）、2、演出した空間（写真で記録する）、3、参加者、4、個別事例の追跡調査、5その他といった内容である。

なお、今井町における年間イベント参与観察調査は2011年9月から2013年7月まで、計20回を実施した。その内訳はヒアリング調査が10回、参与観察調査が10回（防災フェスティバル2回、今井町並み散歩1回、行者まつり1回、地藏尊2回、今井灯火会2回、秋祭2回、その他の追跡調査1回）実施した。

表2 参与観察したイベント

イベント名	防災フェスティバル	今井町まちなみ散歩	行者まつり	地藏尊	灯火会	秋祭り（だんじり）
観察時期	2012年・ 2013年3月	2012年5月	2012年7月	2012年7月	2012年8月	2011年・ 2012年10月
利用する空間	今井町小学校 運動場	重要文化財・各種 施設 地区内の一部街路	地区内・ 春日神社	地藏前・不特 定住居の一室	地区内の一部 街路、公園	地区内の街路、 春日神社
イベント内容	各防災訓練	各種展示・体験	祈願行事	祈願行事	蠟燭展示・ 茶席の体験	だんじり車を引 き、街区の巡回
参加者	地区住民	地区住民、来訪者	地区住民	地区住民	地区住民	地区住民&来訪者

3. 調査結果

3.1 研究対象

今井町は、橿原市の中心部に近く、近鉄橿原線八木西口から徒歩約5分、JR桜井線畝傍駅から約10分という交通の便利な場所に位置する。地区の東には約1300年前の日本最初の都城である「藤原京跡」があり、南には神武天皇を祭る「橿原神宮」があり、また万葉文化のふるさと「明日香」も近い。

今井町は、かつては商家町でありながら自治都市として発展してきた町で、重要文化財である今西家を始め、江戸時代初期の建築が750戸もの「群」として、古い町並みや路地の風情を残しながら、そのまま持続されてきた地区である。東京大学の調査によって「発見」されるという経過をたどり、その価値の認識が町家建築から町並みへと拡大することで、今井町は1993年12月に重伝建地区に選定された。それ以来、電線地中化、町家修復、道の修復などの整備事業が進められ、その成果で景観賞、街づくり賞など多数の賞^{注7}を受賞している。

3.2 各イベントの主催者の概要

3.2.1 今井町防災会とその活動内容

今井町では昔から火災については最大の注意を払っていたという。惣年寄・町年寄が責任者となる消防組織が各町にあった。1795年の「火消役付諸印帳」によると、町内の各家は家持、借家人にかかわらず所帯16人と医者1人が火消の役を割り振られていた。また、火事が起きたとき、遅れたり、出なかつたりする場合は、審議のうえ罰が加えられたという。さらに、町民生活を律した掟にも消防に関して詳しい規定があった。

そして、江戸時代今井町の町定に消防体制などに関することが記載されていた。町人は、火消し役として何らかの役割を担い、使用する道具等で係が決められたという。また、重要文化財・上田家には火事が起こった際の定が保存されていた。さらに、井戸の水は江戸時代から現在まで、今井町では、現在226か所の井戸が確認されている。最も身近な初期消防の役目を持つ。

現在の防災組織は1995年12月9日結成された今井町防災会である。この防災会の体制は本部役員（会長・副会長4名）と各ブロックの役員（6名）及び防災委員（10世帯ごとに1名を選出する）によって構成される。運営費は補助金と各世帯からの徴収によって賄う。橿原市はこの防災組織に対する補助金交付要領により年間18万円の交付をする。自治会が各世帯から300円を徴収し防災会に交付する。

今井町防災会は年度ごとに防災活動を計画し推進する。2012年の事業内容では5つの重点内容がある。①住民の防災・防犯意識の向上、②各ブロックの連絡体制及び各ブロッ

ク内の連絡体制の確立, ③ 緊急事態に即対応できる体制の確立を図るとともに, 要介護者の把握, ④ 防災器具の点検整備, ⑤ 防災フェスティバルの火災の開催である。次に, 具体的な進め方は①の内容を実施する際, 榎原消防署内の施設を活用しながら訓練を実施するとともに, 行政, 消防署, 警察署による学習会を実施する。②については自治会, 民生委員会, 消防署第 10 分団今井町担当者等との連絡を密に行う。③については防災会と消防署第 10 分団今井町担当者と連携し定期的に高齢者の情報を把握する。④については街頭消火器, 防災小屋に収納している防災器具の整備・点検を定期的実施する。⑤については年 1 回の防災フェスティバルを実施する。これ以外に, 他のイベントを開催する際, 参加し協力する。この他に, 防災総会の開催, 年末パトロールの実施, 防災危機管理に関する講演会の参加, などもある。

3.2.2 今井町町並み保存会と活動内容

称念寺の住職・今井博道氏は, いち早く町並み環境の価値に気付き, 1971 年 3 月 18 日今井町を保存する会を発足させ, 事務局長として活動を開始しこの組織は曲折を経て今井町町並み保存会に引き継がれ現在に至る。2010 年 4 月現在の保存会理事は 90 名で, そのうち活動の主体である役員・常任理事は 23 名である。

主な活動内容は 9 項目に区分されている。それぞれの項目の内容を表-3 に示す。今井町町並み保存会が町並みボランティアガイドの育成や勉強会・イベントなどの開催, 情報誌「いまいは今」の作成・配布などを行っている。

表 3 活動内容

No.	主催者	具体的な内容
1	文化財保存	市の町並み保存整備事業とともに, 住民主体の保存目標に住民との対話しながら家屋の整備を行う
2	今井町並み散歩	イベントの一つとして今井町をふれあいの場として, 毎年 5 月に開催する。今年で 17 回目を迎える
3	施設の管理運営	今井町まちづくりセンター, 今井・まちや館, 旧米谷家の三か所の管理・施設説明を保存会のスタッフが交代で行う
4	「いまいは今」の発刊	今井に関するまちづくりの身近な話題の提供を編集委員会が製作し, 月 1 回発刊している
5	暮らしと文化の融合	町家の空間でかまど体験, 落語会, コンサートを開催する場として利用する
6	共同イベントの開催	秋祭り, 今井灯火会などの開催を通じ, 町内他団体との関係を図る
7	メディアとの関わり	撮影と放映は住民の周知と協力を得ると共に実施する
8	隣接地区との調和	保存地区の景観を維持すると共に, 隣接地区の調和も図るための要望を市に提出する
9	その他	講演会, 他県現地視察研修会を実施する 学生の町家体験受け入れ 県外小学生の課外授業の受け入れ

3.2.3 自治会・町内会

自治会・町内会は地域のつながりを維持するための自治組織である。今井町自治員会は今井町保存地区を始め、周辺の小綱町、他の町によって構成される。この委員会は18の町内会に区分されている。主な活動は7つである。①町内会費の徴収、②閲覧の対応、③市広報の対応、④不要ゴミの対応、⑤水槽掃除、⑥主な行事（大神宮さん、地藏さん、⑦役の決め方（区長、組長）といった活動である。

4. 参与観察した事例

4.1 阪神・淡路震災後にみる防災フェスティバル

4.1.1 防災フェスティバル

1995年1月に起きた阪神・淡路大震災と2002年1月末の全国文化財デーからの学びとしていま防災フェスティバルが実施し始めたという。

今井町防災会は、具体的な訓練を行うとともに、今井町の他の団体による豚汁やおにぎりをつくったり、綿菓子をつくったりする、などである。また、独り暮らしの高齢者・同居家庭に設置している警報措置の点検の実施を行う。

年毎に実施する訓練は異なる。たとえば、2002年1月27日では今井小学校体育館にて防災関連競技が行われた。2003年1月26日では今井小学校体育館にて担架の作り方、心肺蘇生などの講習が行われた。2004年1月25日では地区内の防災小屋を予備集合場所として避難訓練が行われた。

4.1.2 防災フェスティバル開催当日

2012年3月4日に防災フェスティバルの当日に火災があった。当日の応急措置、などの出来事を含めて観察した。

午前9時19分ごろ、同市今井町1丁目のKさん（92）の木造2階建て住宅から火災が発生し、火災に気付き駆け付けた住民ら（写真1-1）や消防団員（写真1-2、1-3）が消火器をリレーして消火にあたり、延焼を食い止めて、文化財指定されている近くの建物を火の手から守った。階約40平方メートルと2階約20平方メートルのうち、1・2階部分各約10平方メートルを焼き、約1時間後に鎮火した。また、1週間後の火災事故が検証し終えた現場を写真1-4で示したように2F建ての建物が焼かれ、住めない状態になった。



写真1 消火活動と消火後の様子

次に、防災フェスティバルの内容を説明していく。防災フェスティバルは、橿原市の消防員＆今井町防災会の方が今井町小学校の運動場を利用し、今井町の住民を対象に各種訓練を実施する。開催式・写真2-1, 2-2で示したように、橿原市市長をはじめ、市議員、消防署の方、今井町防災会の方、住民が今井小学校に集まり、防災フェスティバルの開催を迎えてきた。その後各種訓練が実施した。具体的に次のような訓練があげられる。写真2-3で示したように、消防員が消防ポンプの使い方を説明しながら火を消す方法を実施した。写真2-4で示したように、火災による発生した際煙体験、AEDの使い方(写真2-5)、骨折の応急処理(写真2-6,2-7)などの内容がみられる。また、綿菓子作り(写真2-9)の機械も用意されている。さらに、婦人会のメンバーが当日炊き立ての豚汁(写真2-8で示した)も用意されている。

以上で述べたように、今井町は木造建築が多いことから、定期的な防災フェスティバルの開催によって、住民たちの防災への意識を向上させる効果があると考えられる。また、各種訓練で見られたように、消防署の方による訓練方法を詳細に説明しながら、住民と一緒に訓練を行うことが消防意識の向上につながると考えられる。参与観察した当日の火災への迅速な対応ができたのはこれまでの訓練を続けただと言える。

今井町防災会が日常的防災活動と非日常的防災活動を推進し、今井町の町家が守られている。これらの活動の結果から、自分達の力で自分達の町を守ることに努めている。今井町防災会の組織が防災上とても重要な役割を果たしているといえる。



写真2 防災フェスティバルの様子

4.2 重要伝建地区にみる今井町並み散歩の開催現状

4.2.1 今井町並み散歩の開催経緯

今井町町並み保存会は1993年今井町が重要伝建地区に選定後、町並みの修景事業が本格的に開始するとともに、町家復元の促進を担うことになった。1996年10月今井町町並み保存会藤根会長は榎原市のボランティアと話をする際、ボランティアの方々から重要文化財の公開を求められたことに対して、「今井・町並み散歩」を企画し、年に一度の催しとして重文を公開する。この催しの発想は1991年大和まちづくりネットワークのリレー

イベントとして今井青年会が実施した「わが町, 再発見展」での重要文化財の公開であった。また, 五条市のフリーマーケット (かげろう座) を参考に, 江戸時代に開催されていた「六斎の遊び」をヒントに, 商人の町に相応しい行事として, 「今井六斎市」を復活させようとした。さらに, イベントを成功させるため, 開催 20 日前に記者クラブに行きイベントを報道するように依頼して, 朝日新聞の近畿版に「町並み散歩」の記事が掲載された。

イベント企画「今井・町並み散歩」は, 翌年には 5 月の開催となり, 市民の支持を得て毎年恒例の年中行事となった。第 13 回までは開催期間は 2 日間であった。その内容については表 4 に示す。

表 4 第 13 回の開催内容

		5月17日	5月18日
実施内容	語りの書展		スタンプウォーク
	街角ギャラリー		クイズラリー
	今井の商い展		絵画展
	その他		重要文化財及び伝統的建造物の内部公開
			観光ガイドウォーク
			開会セレモニー
			茶行列
			今井六斎市
			名工の館
			わかば会呈茶席
		その他 (各種演奏)	

4.2.2 第 18 回今井町並み散歩の開催内容

第 18 回の開催内容と利用する町家・街区を表 5 と表 6 でしめした。また, 参与観察した町の変化と利用する町家の様子を写真 3 で示した。さらに, 実施した茶行列のレートを図 2 で示した。

表 5 第 18 回の開催内容

		5月11日	5月12日	5月13日	5月14日	5月15日	5月16日	5月17日	5月18日	5月19日
実施内容	町かどアート		}							町かどアート
	スタンプウォーク									スタンプウォーク
	クイズラリー									クイズラリー
	絵画展									絵画展
	語りの書展									語りの書展
	綿繰り実演									綿繰り実演
									重要文化財及び伝統的建造物の内部公開	
									今井町衆市	
									大和今井の茶粥	
									観光ガイドウォーク	
								ギャラリー中井		
									開会セレモニー	
									茶行列	
									今井六斎市	
									名工の館	
									わかば会呈茶席	
									その他 (各種演奏)	

表6 利用する町家・街区

開催内容	利用する町家・街区
町かどアート	地区内防災広場
スタンプウォーク	地区内数か所
クイズラリー	地区内数か所
絵画展	称念寺
語りの書展	華薺（国際交流センター）
綿繰り実演	店舗内
重要文化財及び伝統的建造物の内部公開	重文9件・県指定3件
今井町衆市	順明寺
大和今井の茶粥	今井まちや館
観光ガイドウォーク	今井町地区
ギャラリー中井	観光案内所
開会セレモニー	今井保育所
茶行列	衣装着換え（今井保育所2階）・ルート別紙で示す
今井六斎市	今井御堂筋
名工の館	旧米谷家
わかば会呈茶席	今井景観支援センター
その他（各種演奏）	各種小広場・公園

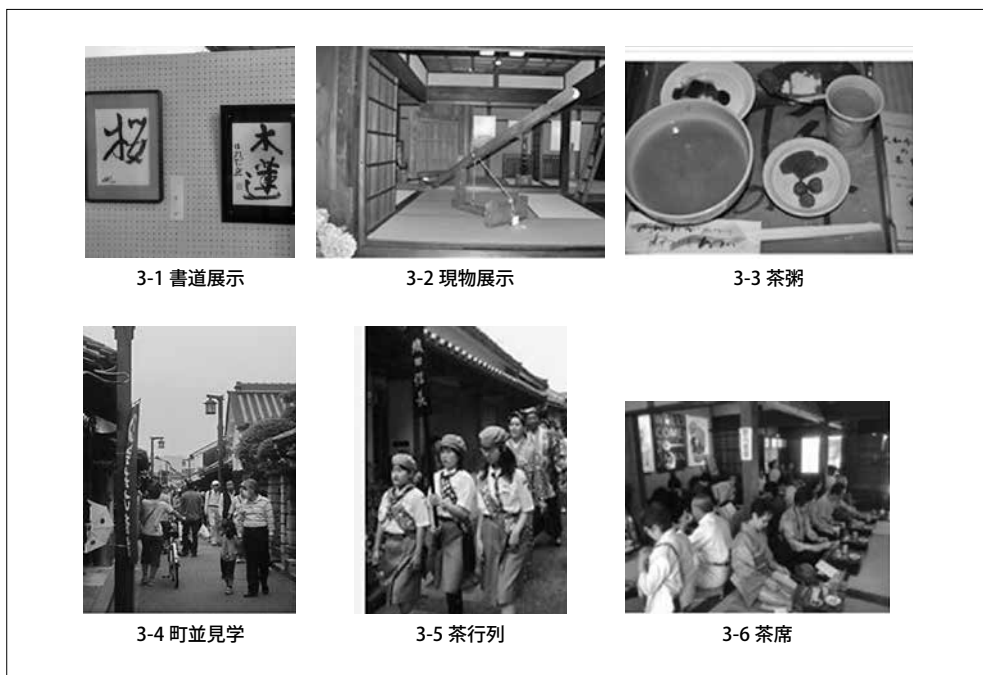


写真3 今井町並み散歩の様子

第18回の開催期間は5月11日から5月19日であった。5月11日から5月17日までの内容は主に展示とクイズラリーを中心とするものである。写真3で示したように、開催

前と開催後の町家の空間と街区空間の違いがはっきりと見られた。前項で説明したように、第13回までの開催日は2日だったが、第14・15回からの開催内容と開催期間が大幅な変化が見られた。

4.2.3 六斎市の出店者の概要

第18回今井町町並み散歩の六斎市に出店した方が118名である。六斎市の出店エントリーシートを整理した結果、118名の出店回数と出店理由についての内容が分かった。10回以上を出店している方の割合は20%を占める。5回以上を出店している方の割合は15%を占める。5回未満を出店している方の割合は60%以上を占める。また出店した理由を分析すると、次のような3点があげられる。①今井町・伝統的な町並みでの出店は憧れがあった。②今井町は昔の商家町であるから、いつか今井町で店を開きたかった。③友人と一緒に店を開こうという誘いがあった。

4.2.4 重伝建地区と町並み散歩

第13回と第18回を比較してみると、次のような変化がみられる。①開催期間が変化していること。当初の1日から10日間にも及ぶイベントとなっている。②六斎市の出店者をみると、10回以上と5回以上を合わせて、40%くらいの方が連年出店しつつある傾向がみられる。③主催協力者も今井町以外の住民が参与するようになった。④開催時期においては、展示施設の記録登録をみると、日本各地から多くの観光客が訪れているとみられる。

4.3 行者まつり

4.3.1 行者まつりの概要

この行者まつりは今井町の春日神社の行者堂にて、毎年7月7日夜7時から行う行事である。修験者が願い事を書いた護摩木を火にくべて、祈祷するものである。また、最近では、屋台みたいなものが少し並ぶようになってきている。参加者は今井町の方々である。

4.3.2 行者まつりの当日

当日観察した様子を写真4で示した。まず写真4-1で示したように、行者堂前に用意している蠟燭を照らしながら参拝し終えたあとに、持参してきた護摩木を行者担当者に渡し、焼き様子を見守る。写真4-2で示したように、祈願護摩木を揃ってから焼き始める。写真4-3で示したように火の拡散を防ぐためコンクリート製のブロックで囲むような形を作り、そこで祈願を行う。写真4-4で示したように火災を防ぐために、地区の消防員たちが常に巡回しながら、火が消すまで横で見守る様子がみられる。

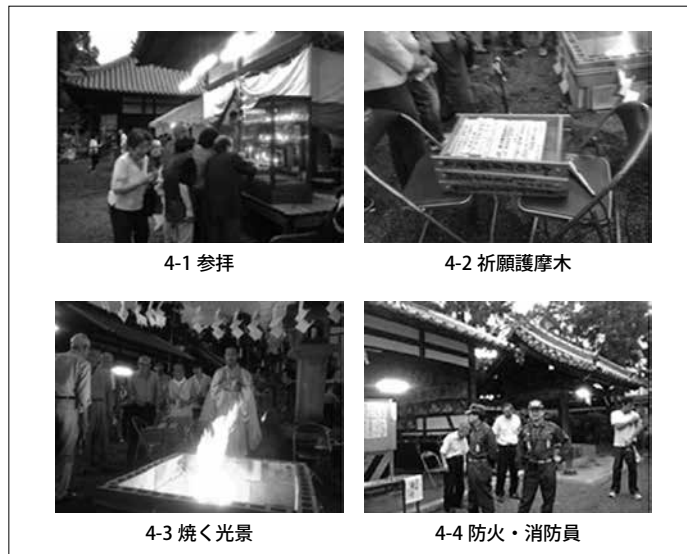


写真4 行者まつりの様子

当日、家族連れの方、または一人が家族を代表し参加する方もみられた。今井町の住民を中心とする行事であるため、持ち込まれる護摩木を焼き尽くすまでに少し時間がかかる。参与観察した日では、夜7時から夜9過ぎまで行事が続けられた。

このように、行者まつりへの参加者は主に今井町の方々が中心であるが、数十名の今井町の近隣から訪れる方もみられる。

4.4 地藏尊

4.4.1 地藏の概要

地藏は安産と子供が健やかに育つための守りとして存在する意義があると言われている。今井町では、大きく地藏がある地区と地藏がない区といった2タイプが見られる。地藏がない地区では、当番制で地藏尊開催する際、その責任を負う。一方、地藏がある地区では、町内会単位で開催し日常的な清掃も当番制で行う。

4.4.2 地藏尊の開催

昔から、毎年7月23日24日に町内会単位で行われている行事を地藏尊という。



写真5 地藏尊の様子

地藏がある区では、写真5-1で示したように、地藏前ではテントを張ってその地藏さんの前で地藏尊を行う。これに対して、地藏がない区では、写真5-2で示したように、家の一室を利用し、地藏を安置して地藏尊を行う慣習がある。7月23日の朝8時くらい事前に用意した粗品を地藏の前に配列する。午後17時くらい各地蔵を巡回するお坊さんが祈願を行う。祈願を行う様子を写真5-3で示した。

4.5 今井灯火会の開催

4.5.1 今井灯火会の概要

灯火会活動を通じてまちの人々が灯をともし、町の安全と繁栄を願い、さらに町民の親睦と、団結を深めるために6年前（2008年）に開始したイベントである。現在は全地区ではなく、希望地区のみ開催している。参与観察したものを写真6に示した。

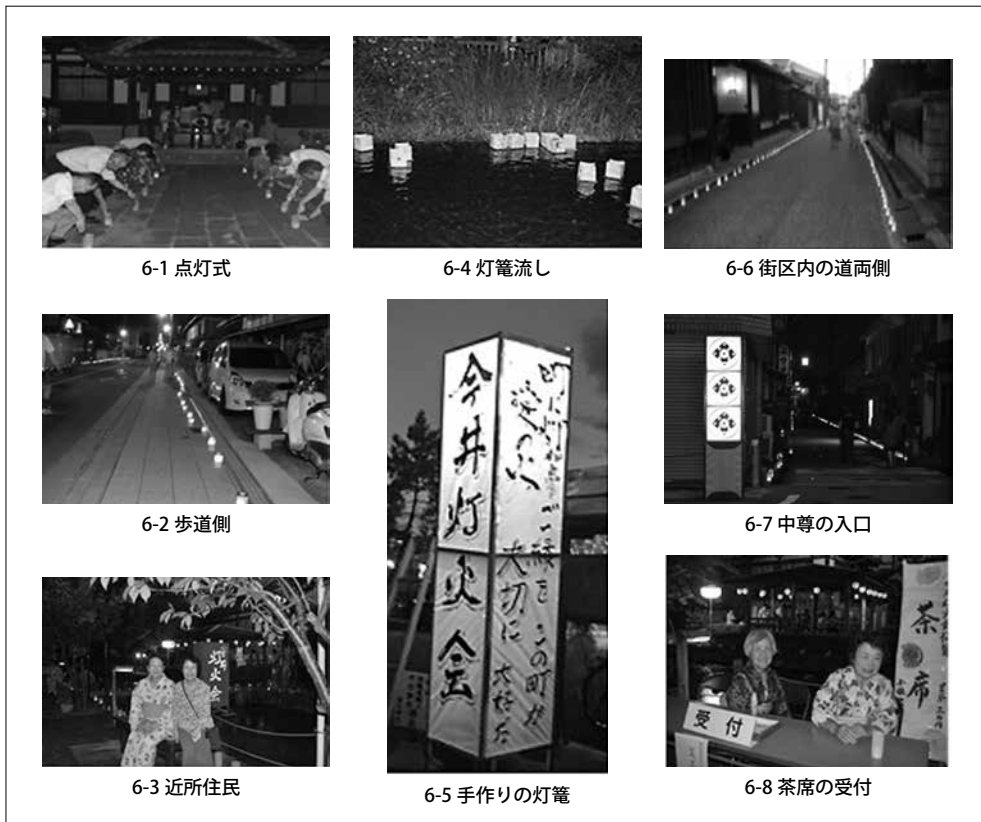


写真6 今井灯火会の様子

4.5.2 灯火会の開催当日

まず、準備までの概要を説明する。当日午前中では、各担当者が蠟燭と道具を配置箇所に運んでいく。茶席、竹の伐採、各会場、などを準備する必要がある。午後17時くらい、各担当者が担当する地区を中心に住民の協力を得ながら、蠟燭の配置などを完了する。そして、午後19時に写真6-1で示したように、点灯式が行われた同時に、写真6-2、6-3、6-4、6-5、6-6、6-7、6-8で示したように、区外の道の片側、街区内の道の両側、春日神社の入口に大きな灯籠が置かれ、今西家の横の堀では灯籠も流した。

同日、今井町の住民を始め、近所からも500名以上の方が灯火会に参加した。

4.6 秋祭り

4.6.1 「だんじり」巡行の復活

1998年10月、春日神社の秋祭りで「だんじり」の町内巡行が40年ぶりに復活した。この「だんじり」は1998年に行われた「奈良シルクロード博覧会」に出展するため、橿原市の助成によって橿原「だんじり」保存会（1997年10月発足）が中心に復元したもので、現在の「だんじり」巡行は自治会が責任を負っている。

「だんじり」の開催当日では、町内を2巡回すると、春日神社で2つの山車が交流することがある。この「だんじり」に合わせるものとして、町内及び周辺の各世帯の軒下で提灯が照らされている。また、当日、春日神社の境内空間でカラオケ演芸大会も開催された。

4.6.2 秋祭りの当日

当日の様子を写真7で示した。昼の町は写真7-1、7-2で示したように、提灯が掛けられ、ダンジリ車が街区の中で巡回をした。夜は写真7-3（街区外を通過する様子）、7-4（子供による太鼓演芸）、7-5（神社境内で合流したダンジリ車）示したように、街区の外側から春日神社の境内空間で交流した。その境内で秋祭りカラオケ演芸が行われた。写真7-8で示したように、大勢の方が参加していたとわかった。

このように、「だんじり」の開催を通じ、ダンジリ車を曳く方々、各家が掛けられた提灯、また、昼と夜の時間変化によって、町家・町並みを利用し一緒に演出した空間がみられた。さらに、普通では交流がなかった住民同士がだんじりまつりの開催を通じ、地区内の交流が見られた。



写真7 秋祭りの様子

5. おわりに

結論は次の3点が得られた。

- ① 今井町住民に向けてのイベントと一般来訪者向けのイベントが見られた。
- ② 今井町町並み散歩のようなビックイベントの開催が住民に負担と影響があると考えられる。住民の負担は主催者の高齢化のみならず、若者である後継者が減少しつつある傾向があることがあげられる。また、今井町町並み散歩が開催する際、大勢の人が町を訪れるため住民の日常生活空間に支障を与えることが挙げられる。
- ③ 年間イベントの開催は多くの観光客を惹きこまれる効果がみられるが、町家の空き家の空間利用に結ぶかどうかは今後調査の課題である。また、年間イベントを継続的に開催していくために、住民と来訪者の双方が満足し合う具体的なイベントの構築をする必要があると思われる。

注

- ① 増井正哉・1994「地域開発における伝統的環境の活用と保全に関する基礎的研究」P215-285
博士論文
- ② 碓田智子・西岡陽子・岩間香・谷直樹・増井正哉・中嶋節子・2002「富山県の城端曳山祭と福井県の勝山左義長祭にみる空間演出の変容」日本建築学会北陸支部研究報告集 No45
- ③ 碓田智子・西岡陽子・岩間香・谷直樹・増井正哉・中嶋節子・新谷昭夫「北陸地方の曳山祭における空間演出と町家の建築様式に関する研究」
- ④ 根田克彦・2010「伝統的建造物群保存地区におけるイベント型観光の可能性—橿原市今井町の事例」奈良教育大学 No59, 第1号（人文・社会）
- ⑤ 田代理恵・2012「文化的イベントが地域協同のまちづくりに果たす役割に関する研究—古い町並みを有する地方都市を事例に—」龍谷大学
- ⑥ 年間イベントとは、重伝建地区今井町において一年の各時期に応じ、開催イベントのことを意味する
- ⑦ 読売新聞社(2002)「遊歩百選」, 奈良県(2002)「景観調和デザイン賞」国土交通省・都市局(2002)「都市景観大賞」などの賞

参考文献

1. 今井町防災会(2012)総会資料
2. 今井町防災会(2012)「今井町防災会・結成の経過と現状」
3. 今井町町並み保存会(2012, 2013)「第17, 18回今井町町並み散歩資料」
4. 今井灯火会実行委員会(2012)「第5回灯火会実施資料」
5. 八甫谷邦明(2006)『甦る自治都市「今井」』今井町町並み保存会
6. 渡辺定夫(1994)『今井の町並み』同朋舎出版
7. NPO法人今井まちなみ再生ネットワーク(2006)『今井町 町家暮らしのすすめ』

YKK 観光——黒部の森と調和した グリーンコーポレーションの展望

—— わが師，YKK の創業者，吉田忠雄社長の経営理念について語る ——

古畑 稔*

Perspective in YKK Sightseeing on the Linkage of a Green Corporation with the Kurobe Forest:
The Management Philosophy of Yoshida Tadao, Founder of YKK Corporation

KOBATA Minoru

1 はじめに

富山県は、県央の呉羽丘陵（通称：呉羽山）を挟んで、西側（金沢方面）を「呉西」と呼び、藩政時代は加賀藩の直轄地だったが、現在の中心都市は高岡市である。東側（新潟方面）は、「呉東」と呼び、加賀藩の属領 10 万石の城下町として栄えたが、現在の中心都市は富山市である。東西側ともアルミ関連産業が発展しただけでなく、山と川と海が織りなす自然遺産も豊富な産業・観光立県といえよう。

黒部市は県の北東に位置し、東は宇奈月町（現在は合併により、黒部市宇奈月町）、北は黒部川（1 級河川：85km）を隔てて入善町、南は布施川を隔てて魚津市である。黒部市が、市制施行 30 年を迎えた 1984 年は、YKK 創業 50 周年記念の年であり、記念式典に出席した第 39 代アメリカ合衆国大統領ジミー・カーター氏の来市を記念し、記念式典の前日の 5 月 22 日、第 1 回「カーター記念：黒部名水ロードレース」を黒部市が開催した。この大会はその後も続行され、2013 年で 30 回を数えた（第 1 回はジョギング大会、第 10 回から現名称）。黒部市の西の海辺の町「生地地区」に立地する YKK 黒部事業所へ行くには、北陸本線の黒部駅からタクシーで約 10 分。——黒部駅の隣駅「生地駅」から徒歩 15 分程度の距離である。最寄り駅の生地駅前広場には「清水の里」（オアシス＝ウォーターブレイク／湧水 11～12 度）があり、四季を通してこんこんと湧き出ている。

黒部市は今や、富山県の県東の観光都市であり、昭和 60 年には、環境庁の「全国名水百選」（黒部川湧水群）に選ばれた「名水の里」である。そして、工業の拠点でもある。平成 26 年には、北陸新幹線「新黒部駅」（仮称）が誕生すれば、富山県東部の玄関口として大いに期待されるところである。なお、同年は YKK 創業 80 年にあたる。

私は、1979 年 12 月、三井物産(株)大阪支店から富山支店へ転勤した。YKK 黒部「吉田城」

*ブラジル民族文化研究センター会長

との最初の出会いは、翌春、新潟出張から富山市へ戻る途中の北陸本線の車窓からであった。YKK 黒部「吉田城」の造形美（白舎の棟列）は車窓に映え流れ、その鮮烈さに強く魅了されたことが記憶に残っている。翌々年の1981年1月に仕事上の結縁が生じたけれど、1984年「YKK50ビル」が建設されるまでは、木造平屋立て、戦前の田舎に見かけた小学校の講堂風な事務所だった。事務所内は左右に分かれ、その中央が通路になっていた。右側の中央の壁側に社長のデスク、デスクの前には応接兼社内ミーティング用のテーブルが据えられ、本当に緊張を感じる事務所であり、吉田忠雄社長とも何度か対話の機会もあり、凝縮した約6年の富山滞在であった。当時、創業者吉田忠雄社長の経営哲学に触れ、学習することができた。それゆえ、私にとってYKKは「温故知新の会社」（わが心の師、仕事の恩師）に他ならず、そこで得た経験は、大阪に戻り、製造会社での業務に活かされたのである。今回の「研究ノート」では、吉田忠雄社長の経営理念を考察したい。

2 YKKの社風はどのようなものか

規模の大小や業種の問題も絡んでくるが、個々の企業の社風は、その成立過程や創業者の語録などから理解できるのではないか。興味深いことに、池田政次郎著『YKK 連邦共和国 ―― 不思議な会社の世にも不思議な成功物語』に収録されたインタビュー「世界を制した吉田イズム」では、YKKの創業者、吉田忠雄氏の思いが、次のように記されている。「初めから、『普通の会社』のつもりでやっとなのです。会社は資本家のものであってはならない。YKKは、『共に汗して共に働く』者たちの集団。社長だろうと現場の作業員だろうと、そこに上下の隔たりはいっさいない。うちの組織は森林なんです。いろんな樹木が集まって、それぞれ自生しながら根を広げていく。ピラミッドであっては困るんです」。さらに、同書の鉢巻きの裏面には、「YKKグループは、創業者吉田忠雄の経営理念である『善の巡環』を企業精神として運営されている。YKKグループの一人一人が独立自営の経営精神をもちながら、大規模経営の長所を生かしているところは、森林のような集団であり、共和国を連想させる。他人の利益を図ることによって、人類社会に貢献しながら、自らも栄えて行くという、『善の巡環』の理念は、国際的企業としての強力なバックボーンとなっている」（下線筆者）と書かれている。

この発言からわかるとおり、吉田忠雄社長は人生行路において、甘さを決して見せないが、狭量で閉口するような性格を持ち合わせていなかった。不安が転じて戦慄と恐怖になれば、その勢いにより、混在する心性はいつしか量的な限界を越え、抑制が効かず質的に変容するものである。しかし、吉田忠雄社長はそれを上手にコントロールしていた。自己の「升」を正確に測定し、あたかも黒部ダムのように、必要な水量を外へ流す穏当な姿勢が、混沌のうちに1つの秩序を秘めていたと考えられる。これから、私は具体的な見聞や

体験談に沿って、その点を裏づけていきたいと思う。

YKK 株式会社および YKK グループの概要

■ [YKK 株式会社]

- 創業 1934年(昭和9)年1月1日
(1994年8月、吉田工業株式会社から現社名に変更)
- 資本金 119億9,240万5百円(2012年3月31日現在)
- 本社 東京都千代田区外神田1-18-13 秋葉原ダイビル11F
- 黒部事業所 富山県黒部市吉田200
 - ① 黒部事業所は、YKKグループの技術と開発の中核拠点であり、黒部工場、黒部牧野工場、黒部越湖工場、黒部萩生工場から成る複合機能を持つ事業所である。
 - ② 黒部事業所には、工機技術本部があり、YKKグループのモノづくりの原点「一貫生産とシステム」を支え担う黒部工場がある。

■ [YKK グループ]

連結売上高(2011年度実績)5,444億円(ファスニング2,165億円;建材3,229億円)他従業員(2011年12月末現在)39,000名(国内17,000名;海外22,000名)会社数(2011年12月末現在)世界71カ国/地域(国内21社;海外88社合計109社)

世界6極体制	北中米	南米	EMEA	東アジア	ASAO	日本	合計
社内外の会社	13	6	29	22	20	21	111社

(注) EMEAはヨーロッパ・中東・アフリカ、ASAOはアセアン・南アジア・オセアニアをカバーするエリアである(YKK企業概要『THIS IS YKK』2012-2013年を参照)。

3 吉田忠雄社長の経営理念と黒部事業所の位置づけ

私がこれまでに集めた資料によると、黒部事業所(生地工場、現在の黒部工場)の工場生成物語は、YKKの事業家、吉田忠雄社長と初代黒部市長であった荻野幸作氏との合作と判断することができる。両者が盟友同士の関係だったことは、黒部工場の誕生の経緯に絡めて、吉田忠雄社長がNHK教育テレビの『吉田忠雄 私の自叙伝 一独学自立・そして世界へー』(1978年4月13日放映)のなかで語っている。「いまのYKKのメインプラントになっております富山県黒部市の生地工場の用地を決めるときには、地元の黒部市の市長、市議会の方々、商工会の皆様が大挙してやってこられまして、わたしの生まれた魚津市に新工場をつくる計画をなんとか止めて欲しい、ぜひ、この黒部市につくって欲しい。

そのために10万坪の土地を無償で提供するから、とまでいっていただきました。当時の市長であった荻野市長をはじめ、地元の人々の三顧の礼には、ついにわたしもほだされました。黒部市にお世話になりましたのが、いまの生地工場なのです……」（吉田忠雄記念室 第2回企画展資料より）。

黒部市は、桜井町や生地町（海辺の町）などの町村合併により、昭和29（1953）年4月1日に市制へ移行し、初代市長として荻野幸作氏が就任した。しかし、黒部市の主産業が「農業と漁業」であることに変わりはない。荻野市政は、YKKの魚津計画を知って、YKKの黒部市誘致に全力を注いだ。荻野幸作市長と事業家の吉田忠雄社長との「地域発展」に賭けた志の融合、そして市民の願望の結晶が黒部工場である。言い換えれば、黒部工場は、黒部市とYKK、そして双方を取り巻く人々の「お宝」であり、「絆」の証なのだと思うを得ない。

さて、YKKは、創業50周年を記念し、1984年、黒部事業所内に「YKK50ビル」を建設したが、同年5月23日、国内外の来賓を迎え、黒部市体育館において盛大に式典を開催している。前々年の1982年には、黒部市南部の丘陵に前沢ガーデンハウス（迎賓館）の建設を行っており、これら二つの建物は、国際企業たるYKKのシンボルともいえる。YKK50ビル内には、オフィス、国際会議場、レセプション・ホール、吉田忠雄記念室、アトリウム、創業を功勞した「5人の像」、環境への取り組みコーナー、展示ホールなどがある。さらに、前沢ガーデンハウスは、YKKが「国際交流の拠点づくり」という夢を託し、1982（昭和57）年に建設されたゲストハウスである。単に一企業の迎賓館としてだけでなく、地域社会の様々な国際交流の拠点の場としても活用されている。

YKKの創業者、吉田忠雄社長が亡くなった、平成5（1993）年7月3日の翌々年に、創業者の経営理念（善の巡環）、事業経営のノウハウ、事跡などをより身近なところで学び、日常業務のなかで活用することを目的として、YKK50ビル内に「吉田忠雄記念室」が、平成7（1995）年6月29日に開設された。この記念室は、（1）吉田忠雄の思想（2）吉田忠雄の足跡（3）吉田忠雄の人となり、という3コーナーで構成されている。吉田忠雄社長の経営理念と黒部事業所の位置づけを考察するために、以下、筆者の取材と観察も含めて整理しつつ、非常に重要と思われる点を挙げてみたい。

記念室1：吉田忠雄の思想「善の巡環」

(a) 「善の巡環」は、YKKの創業者、吉田忠雄社長が生まれ育った故郷、生きてきた時代、そして触れ合った多くの人々など、彼の多彩な背景を縦糸・横糸にして織り上げ、世に認められた「思想の漬物」といえるかと解説する。このコーナーでは、吉田忠雄社長が「善の巡環」という「思想の漬物」を完成させるために、どのような素材を使い、どのようにデザインを使用していたのか、その軌跡を起源、概念、事業での実践例

や記録などにより紹介している。

- (b) 吉田忠雄社長は、小学校の5年か6年のとき、教師に「どうしたら偉人になれるか」と聞いたそうである。その際、教師は、吉田少年に「世に出て偉くなった人の伝記を、じっくりかみしめて読みなさい」と教えたという。吉田忠雄社長は言う。「私は少年の頃、偉人伝を読むことが好きで、貸本屋へ行っては片っ端から読みあさりました。そのなかでとくに感銘を受けたのは、アメリカの鉄鋼王と言われた、US スチールの初代社長アンドリュー・カーネギー伝でした。カーネギーは、富は『神からゆだねられた神聖なもの』という考えから、産業界から引退した後も巨額の私財を社会事業に投じ、神の富を社会に返そうとした、とされています。そのカーネギーが体験から得た成功の秘密は、『他人の利益を図らずして、自らの繁栄はありえない』でした。私は子ども心にも、この言葉に大変に心を惹きつけられ、以来、私の信念としてきたものです。そして、そこから『善の種をまいて、善を尽くしていけば、必ず善はむくわれていく、奪うことなく与える。与えることによって〈善〉は限りなく巡る』という『善の巡環』が生まれ、それは私の人生にとってはもちろん、事業を進めるための指針となってきたのです」(吉田忠雄著『「なしたもんだの経営」——善之巡環の発想と実践』、千広企画出版部、1982年を参照)。
- (c) (YKK精神) 善の巡環 ～他人の利益を図らずして自らの繁栄はない～ この吉田忠雄社長の経営理念は、現在のYKKにも脈々と受け継がれている。それは、代表取締役会長(CEO)の吉田忠裕氏の訓示から充分汲み取ることができる。「企業は社会の重要な構成員であり、共存してこそ存続でき、その利点を分かち合うことにより、社会からその存在価値が認められるものです。YKKの創業者、吉田忠雄は、事業を進めるにあたり、その点について最大の関心を払い、お互いに繁栄する道を考えました。それは事業活動のなかで発明や創意工夫をこらし、常に新しい価値を創造することによって、事業の発展を図り、お得意様、お取引様の繁栄につながり社会貢献できるという考え方です。このような考え方を吉田忠雄は「善の巡環」と称し、常に事業行動の基本としてまいりました。私たちはこの考え方を受け継ぎ、YKK精神としています」(『THIS IS YKK』2012 - 2013年)。

記念室2：吉田忠雄の足跡

吉田忠雄社長を事業家として大成させた原体験は、少年時代および古谷商店勤務の青年時代にあったといっても過言ではない。そこには、ファスナーとの出会いを含め、数多くの奥深いドラマがあった。また、独立創業時の東京日本橋区蛸殻町、初めての自前工場であった東京・小松川、疎開先の魚津など、それぞれの事業所在地でも数多くの苦難に遭遇したが、それらを解決することで、事業家としての自信を深めていった。さらに、チェー

ンマシンの導入（吉田忠雄社長の先見性により、国内市場の席卷をもたらす）、黒部での一貫生産体制の実現と完成、アルミ建材への進出など吉田忠雄の事業家としての足跡は、終わりなきロマンへの挑戦であった。このコーナーでは、事業家としての節目や転機となったドラマや事例を中心にその足跡を振り返り、紹介されている。

記念室3：吉田忠雄の人となり

「吉田さんほどストイックな経営者をほかには知らない」というのが、経営評論家の三鬼陽之助氏による吉田忠雄評である。その一言に、吉田忠雄の人となりが集約されているといえるが、しかし、諸々の遊びや楽しみごとを知らなかったわけではなかった。逆に、自前の好奇心を働かせ、何事でも知りすぎるほど知っていた。また、知っていたからこそ、そのなかに埋れることの怖さや弊害が見え、避けていたともいえる。——そうした吉田忠雄社長の他人との交流、趣味、思い出などを紹介するコーナーである。

すでに言及した『なしたもんだの経営』のなかで、吉田忠雄社長は、次のように語っている。「……『なしたもんだ』という言葉、ちょっと耳慣れないもので、何のことかと、首をかしげる方も少なくないかも知れません。私は富山県の魚津で生まれ、育ったのですが、『おのれは、なしたもんじゃ』という言葉をよく聞いたものです。その意味するところは『お前はいったい、何様かと思っているのか、何様になったつもりなのか』といったところであり、驕りやたかぶった人に対してのいましめの言葉であって、私にとっては、何にもまさる人生訓として、常に、自分自身に言い聞かせてきた言葉なのです。よいときには『これでよかったのか、もう紙一枚の努力と工夫があってもよかったのではないかと、たづなを引き締める言葉になり、悪いときには『驕っていて、状況判断に甘さがあったのではないかと』という、自分への叱咤激励の言葉でもあります。

趣味は読書であったという吉田忠雄社長だが、その生涯にもっとも強い影響を与えた本の一冊として、野間清治著『野間講話集』（1878～1938年）がしばしば引き合いに出されるのは、むべなるかなである。

4 21世紀を展望するYKKと産業観光への道

創業50周年記念の1984年、YKKが黒部事業所内に「YKK50ビル」を建設したことは上述のとおりである。YKKセンターパークは、創業100年（2034年）へ向かう途中の節目の年（創業75周年記念）である2009年、黒部事業所内において、YKKグループの歴史や技術、そして環境への取り組みなどを紹介する産業観光施設として設立された。一般公開を始めたのは、同年4月1日からである。

YKK センターパークの概要

- 所在地：YKK 黒部事業所内 TEL 0765-54-8181 FAX 0765-54-4891
- 敷地面積：76,600㎡（黒部工場 1,037,000㎡）
- 緑地面積：46,400㎡（植樹 7,500㎡／芝 38,900㎡）

最寄り駅：JR 北陸本線黒部駅の隣駅「生地駅」で、徒歩 15 分程度の距離である。

平成 26（2014）年には、北陸新幹線の開通に伴い、「新黒部駅」が誕生する。

YKK センターパークは、YKK50 ビル&緑のエリアを中心としつつ、その他に丸屋根展示館やラウンジなどで構成されている産業観光施設である（入園は要許可、見学自由）。ただし、黒部工場を回るパックスツアー参加者は予約申し込みが必要とされる。

黒部川の源流は、鷲羽岳から富山湾までわずか 85 キロにすぎず、黒部川は日本屈指の急流で、山々を削りながら、日本一美しいといわれる扇状地をつくり上げてきた。黒部川の全長の 80% が V 字の黒部峡谷で、ほとんどが「上流」ともいえる独特の地形——豊かな雨や雪解けの水が一気に山から下流に流れるが、急激に傾斜が緩むために、美しい扇状地が形成されていった（黒部市商工観光課の談話）。

黒部川扇状地の中央に広がる黒部事業所内の「緑のエリア」は、ふるさとの森、さくらの森、芝生広場から成ります。また、周辺には、かつて暴れ川といわれた黒部川の洪水に耐え残った種々の小さな森が点在していた。YKK の創業者、吉田忠雄社長の生誕 100 年に当たった 2008 年から、失われつつある「黒部本来の自然」を少しでも残し、黒部の原風景を再生すべく、黒部川扇状地に育成していた樹種（潜在植生）約 20 種類、2 万本を苗木から育て上げ、次の世代へ引き継いでもらうように、社員だけでなく、地域の方々の協力も受けて植樹が行なわれた。その木々の成長を見守ってもらおうと、一般公開されている。吉田忠雄社長は、働く工場のあるべき姿を「森の中の公園のような工場」であることを理想とした。それゆえ、YKK 創業 100 年を迎える 2034 年には、管理棟である YKK50 ビルの周辺が緑豊かな森となるように、2008 年より「ふるさとの森」の再生に着手したのである。その吉田忠雄社長の理想は、社員により継承され、観光産業として開花するであろう。

ところで、吉田忠雄社長の目指した「原料から製品まで」の一貫生産体制は、「紡績、染色、溶解、伸線工場」など、前例にない大きさと多岐にわたる設備増強が要求され、社内外から成り行きを危惧する声や反対意見が上がった。なかでも、銀行が難色を示したのが、ファスナーテープ用の紡績工場の建設計画であり、銀行は「モチはモチ屋に任せるのがよい。タイヤメーカーでも、紡績工場を持ちたがって、皆失敗したではないか」と、過去を振り返って強く批判したのである。

吉田忠雄社長も負けていなかった。「私は、すべて計算したうえで、ものを言っているのだ……」と、銀行の審査部長と2時間にわたって議論したこともあった。そのときは、銀行の常務が「社長ねえ、銀行の審査部長と喧嘩しても得にならないから、やめろよ」ととりなしてくれたが、吉田忠雄社長は引き下がらなかった。「原料から製品まで」の完全一貫体制づくりの「第2次5カ年計画」は、当初の予定1959年より2年早く1957（昭和32）年11月に達成したのである。吉田忠雄社長は、川上溯上主義と透徹した論理でテープ紡績工場を完成させたが、いみじくも「……私にとって今いえるのは、私がもし譲っていたら、今日の吉田工業（現YKK）は存在しなかったということである」と述懐している（日本経済新聞『私の履歴書』を参照）。

ここで、「丸屋根展示館」について少し触れてみよう。これは、1958（昭和33）年、黒部事業所内に建設されたもっとも古い建物で、歴史と物語のあるファスナーテープ用の紡績工場である。歴史というのは、YKK黒部での「一貫生産」が、この紡績工場から始まったからである。物語というのは、銀行の論理と吉田忠雄社長の、積年の事業の実践理論との攻防のことである。2008年における吉田忠雄社長の生誕100年を機に、YKKのこだわりを象徴するモニュメント「丸屋根展示館」として一般公開された。展示館は、次の3つのモチーフにより紹介されている。(1) 吉田忠雄技術思想展は、創業者たる彼の特性を活かしたモノづくりへの挑戦と軌跡、その原動力になった技術への強い思い入れを紹介。

(2) 世界最高品質のジーンズ用ファスナー、高層ビルなどに使用されるカーテンウォールの展示。(3) 金型の展示。金型は独自の材料を開発して自社生産。高精度・長寿命の金型は、世界標準品質を実現したが、YKKの技術と一貫生産システムの成果として紹介。

かくして、吉田忠雄社長は、「善の巡環」という概念のなかで、事業を興し、事業を発展させるためには、（黒部ダムの貯水のように）「貯蓄」の必要性和大切さを挙げ、どんなアイデアがあっても、それを実現させるべく、用途を縛られない自由に使える自己資金が必要だと強調していた。この見解は、彼が海外視察から帰国した1930年前半には形づくられ、現在のYKKを特徴づける「社内持株制度」や「社内貯預金制度」に発展していくのである。すなわち、YKKは、顧客と会社、そして社員の三位一体の組織であり、顧客満足を満たせば、会社に善の巡りがあり、社員にも善の巡りがあり、すべて円満におさまるというわけである。

最後になるが、センターパーク内の休憩所であるラウンジにおいて、カフェ・ボンフィーノが、YKKブラジル農牧社から直送した豆で、オリジナルコーヒーを賞味することができる。YKKブラジル農牧社は、ブラジル政府による大型農業開発計画「セラード計画」地域に立地する農牧場（ミナス・ジェライス州・ボンフィノポリス郡：面積3,327万5,000坪）であり、コーヒー・米・大豆・トウモロコシといった農産物や肉牛を飼育する農場として、現在もブラジルの大地に息づいている。これは、YKKブラジル社の社長、会長を

勤めた鈴木勇氏が取り組んだ事業であり、海外の人々との絆を求めた、吉田忠雄社長の薫風を受けたものだった(八木敦子著『わたしのブラジルまったり生活』,近代文芸社を参照)。

5 まとめ——結語にかえて

日本には四季がある。富山にも、季節ごとの詩情が水のように流れつづけ、巡環している。海を背にして、視線をはるか遠くに向けてと、冬には眼前の白い山が押し寄せるかのような威容をたたえている。しかし、表面的な美しさを追求するだけでなく、ひたひたと接近する苦悩を跳ね返す内面の優雅さも伴わなければならない。YKK ならびに創業者の吉田忠雄社長を振り返るとき、私の脳裏には常に、この風景がよみがえるのである。

私は、三井物産株式会社に勤務中、6年ほど富山支店(現在:北陸支店)に滞在した。吉田忠雄社長をはじめ YKK の各位とは、その後も今も、密接な交流が存在している。富山から家族と共に大阪へ戻り、30年近くが経過した後も、いつの日か懐かしい富山の思い出を書いてみたいと願っていた。私は日ごろ、散策の途中に際して、折々の感慨を大学ノートで整理することを好み、富山から帰郷した後、いくつかの紀行文を綴ってきた。これは、私が抱く「温故知新」という気持の原点に他ならず、吉田忠雄社長の経営理念を繰り返し学び返して、私なりに到達した感慨なのである。その意味で、吉田忠雄社長は私の人生で出会った忘れがたい一人といえる。——それほどまでに、彼の「善の巡環」という思想は、私の自然観にしっかり結びついているのだ。最後に、吉田忠雄社長を補佐した2人の兄と2人の後輩について説明し、YKK のチェーンマシンを回顧しつつ筆をおきたい。

1. 創業『5人の像』——創業者吉田忠雄社長の2人の兄と2人の後輩——

YKK50ビルに展示の創業『5人の像』は、1984(昭和59)年、創業50周年を記念して製作された、創業者吉田忠雄社長を囲む2人の兄と2人の後輩の群像である。共に富山県魚津市出身。

- ・左側の坐像は吉田久政(長兄,最終:副社長),立像は吉川喜一(後輩,最終:副社長)
- ・右側の坐像は吉田久松(次兄,最終:会長),立像は高橋利雄(後輩,最終:副社長)

吉田忠雄記念室は、目前に迫った21世紀の前年(1999年2月)に、第3回企画展(「テーマ:創業『5人の像』物語——創業者を補佐した2人の兄と2人の後輩——)を開催した。当年は吉田忠雄社長の7回忌の年に当たる。また、補佐の先人の4人もそれぞれに由緒ある年回忌を迎えた。この企画展は、創業者吉田忠雄社長と表裏一体になって、YKKを隆盛に導いた2人の兄と2人の後輩にスポットを当て、創業者を中心にどのような個性

を發揮しながらバクトルを合わせ、事業と発展を導いたのか、その業績を改めて検証したものである。創業者吉田忠雄社長を軸とした4人の物語のなかには、21世紀の社会にあっても使えるニーズの発掘の企画である。

2. 吉田忠雄社長とアメリカのイージー社のチェーンマシンの単独導入の決意

(1) 全国ファスナー協会の理事長に就任した吉田忠雄社長は、アメリカのイージー社チェーンマシン（高速ファスナー植付機）の共同導入・共同経営を提案したが、2年間、賛同者は一人も出なかった。それゆえ、1950年に4台を単独購入した。国内市場を席卷し、また、ファスナー先進国と同じ土俵で戦えるようになり、今日のYKKを築く礎になった。

(2) 1964年には、世界最高水準の自主開発ファスナー製造機「YKKチェーンマシン(YKK-C6)」を誕生させた。YKK-C6は、ファスナーの用途拡大と世界の標準品質を実現し、海外展開を牽引したのである（2011年、日本機械学会より「機械遺産」の認定を受けた）。

若者旅離れ考

——若者は旅をしなくなったのか？

白幡 洋三郎

先日、ドイツの中小都市をいくつか巡った。3日目くらいまでは、予想外の元気で、日本なら朝食のトーストを半枚程度食べればもう満腹の感じなのだが、ブロッチェンを軽く2～3個は平らげられる。それもまずは各種のハムやサラミ、チーズなどと共に味わい、ついで甘いジャムや蜂蜜をつけて……、そして締めくくりは果物のコンポートにヨーグルト。このほか飲み物として水を1杯、果物のジュースを1～2杯、コーヒーは普通3杯くらいは飲む。これくらいの量を摂取すると私は昼食を抜いてしまう。量にして日本での朝食の5倍以上は食べているからだ。これにはパン、バター、ハム、チーズのうまさが強く関係すると思っているのだが、それだけではないだろう。久しぶりの本場のパンとそれを引き立てる肉・乳製品がずいぶん食欲を誘うのではないかと感じた。

今回は19世紀のドイツ都市の変遷を文書館、資料館などに通って調べていたのだが、4日目あたりで元気がくじけた。おいしく食べられはするけれど、口にする朝食の量もどこか勢いが弱まって、食後には資料館に向かうのがおっくうだなという気分が頭をもたげてきた。[疲れた……、休みたい……]。

文書・資料の閲覧に疲れたら、旧市街をぶらついたり、文化施設の見学をすれば良い。残存している城壁や、城壁跡地を利用した緑地・公園、あるいは劇場・オペラ座など私の研究の当の対象でもある施設見学が息抜きになるのだが、それすらやる気が萎えてしまった。[衰えてきたなぁ……]。いよいよ定年に近づいた我が老化の確実な証拠だな、という想いが心よぎった。同時に、昨年の学会総会で提案された今年の学会で取り上げるべきテーマが頭に浮かんだ。

「若者はなぜ旅をしなくなったのか」

朝食を終えて自室に戻った私は、自問自答していた。

[若い頃、こんな疲れの気分は持たなかったぞ……]、[しんどいな、今日は調査や見学はそこそこにして部屋で休もう。……数日すれば日本に戻れる。]

老いた自分がはっきり自覚された。かつてスケジュールのない旅に出た若い頃は、未知の場所はみな行きたいところでもあった。ところが今はそうではない。体力・気力・そして好奇心までもが、ずいぶん衰えてしまっているようなのだ。

そんな感覚をもとに「若者の旅離れ」に考えを向けた。

[もし、現代の若者にも老人のような「しんどい」感があるとすればどうだろう。彼らが「旅をしなくなった」のも「旅を求めなくなった」のも理解できる面がある。しかし、本当に若者は老人と同じく「疲れている」のか、「しんどい」のか。そして「旅に出るのがおっくう」なのか……。]つまり[ほんとうに老化、世代ぐるみの「老化」なのではないか]。そんな思いも浮かんだのだが、これではまことに寂しい。その上、それで説明がつくか、という物足りなさも強く残る。

好奇心の衰弱、弱体化もあるのだろう、と思うがそれも老化の一種ではないか。かつて旅行とは「移動をともなう好奇心の充足」と定義したことがあるが、それも含めての再吟味が必要らしい。

人間は「粉もん」の食文化に どのような魅力を感じるか

古畑正富

筆者は2013年度春学期、京都外国語大学スペイン語学科で「ラテンアメリカ文明史Ⅰ」を講義したが、比較文化論の立場から検討を進めながら、「人間の歴史と食文化に関する日本語の作文」という課題レポートを書かせてみた。世界各地の食文化を振り返ると、粉食文化ならびに粒食文化という2つのキーワードが存在するけれど、粉食文化がより大きな場を形成してきたことは確かであろう。たとえば、青山和夫(2007)『古代メソアメリカ文明——マヤ・テオティワカン・アステカ』、講談社選書メチエ、11頁は記す。

「メソアメリカ原産のトウモロコシは、古代から先住民たちの主食である。……日本と同様に、そのままゆでるか、焼いてトウモロコシを食べることもあるが、製粉して、料理を作るのが一般的といえる。伝統的な調理法では、食用の石灰水に一晩漬けたトウモロコシの粒を、製粉用石盤メタテと石棒マノで挽きつぶし、マサと呼ばれる練り粉の玉を作る。そこから必要量を取り、薄く平たい円形にして、土製板や鉄板の上で焼いたのが、トルティーヤである。トルティーヤは、肉、マメ、野菜などをはさんで食べる、現代中米料理のタコ（複数形はタコス）の皮でもある」（下線筆者）。

興味深いことに、類似した状況は、イスラエルの食文化にも発見される。フードコーディネーターの越出水月氏は、イスラエルにおけるペサハ（過越祭）の食事で登場する、マッツァと命名された、クラッカーに見紛う（イースト菌を使わない、種なしの）パンに着目し、次のように述べる。「（私がイスラエルにいた頃）『マッツァを有効活

用する20の方法（20 Things To Do With Matzah）』などという歌がYouTubeにアップされて流行っていた。……ちなみに、マッツァを砕いたマッツァ粉なるものもその時期は市販されており、それで作ったパンやケーキ、団子などをペサハ中には食べたりする。マクドナルドもこの一週間は、マッツァ粉で作ったバンズを出していて、何とも言えないハンバーガーに変身する」（『みるすと』第127号、2013年4月、51-52頁を参照）。

実のところ、筆者はたこ焼き、お好み焼き、餃子、肉まんが大好きだが、こうした「粉もん」の料理は魅力的な「ソウルフード」と化し、心情において一種の「親密圏」を反映していると考えたい。すなわち、日本内外を問わず、我々に馴染み深い粉食文化を俎上に載せてみれば、庶民と風土の有機的な結びつきや個性に富む歴史的背景がひしひしと伝わってくる。——それはまさしく、小麦粉、片栗粉、ひいては吉野葛などがもつ、とろみ&つなぎの美学を表現した通信網のような世界観に他ならない。したがって、米国の母の味を代表する菓子アップルパイ（AP）さえ、旧大陸と新大陸の文化を仲介しつつ、渾然一体になった姿かたちへ人間を誘う《導水橋》と理解しても違和感をおぼえる点はないのだ。

ケンチャナヨーの深み

李 有師

韓国^{アンドン}安東市は家内の本籍。鶴橋に暮らす、その父上が80に届き、尋常小入学後、すぐに出奔させられた故郷を「いま一度この目で」と、仰る。よ～し、LCCでと思い立ち、エアプサンで家内と三人、キャンペーン往復価格@1万2千円の旅に出た。

釜山から東テグ経由、高速バスを乗り継ぎ約4時間。はじめて見る家内の故郷は、国鉄・安東駅とその駅前に、こじんまり、しかし伝統的な風情を漂わせながら静かに佇んでいた。

そんな町にも昨年、郊外に最新の高速バスターミナルが完成、運用が開始された。一体で新しい都市核整備が進むが、構想全般の誘致は滞り気味。その結果、賑わいは横ずれし、伝統も希釈され、スカスカの風船のように町全体が弛緩したような印象もあった。

安東駅前から約40分、路線バスで向かったのは「韓国儒教の桃源郷」と聞かされていた世界遺産・河回村だ。村内「入口」には、英国エリザベス女王来村メモリアルが鎮座、どう見目に見ても「ミスマッチ」なのだが、世界遺産という欧州伝来の威力に、妙に納得。とんとんやってくる団体客を出迎える。一般的にはツアーバスで訪れるようだ。

大人気の村内「民泊」は、大繁盛で客疲れがありありとうかがえた。「村民の居住そのもの」が世界遺産である安東・河回村は、羨ましくも、気の毒にも見えた。

安東駅近くのホテルに投宿した。2泊目深夜、度々の異音で寝付けぬ。天井裏あたりが激烈に騒ぐ。フロントに出向こうとしたが、義父は「こんな時間だから我慢しよう」と、制す……約75年ぶりの里帰り、事を荒立てたくない……が、そんな義父の願いも

むなしく、異音は過激さを増し、息が止まるほどの衝撃音の後、ついには停電した。「やはり天井裏のショートだ……」怖さが募った。しかし義父はさらに言った、「明るくなるまで我慢……」と。ところが、今度は焦げ臭い。これはヤバイ！ フロントの当直を叩き起こし確認させた。真っ青な表情になった当直は、すぐに消防に通報した。5分もたたないうちに梯子車が来た。消防隊員は10名ほど。その様子を呆然と見守った。発見が速かったこともあり、出火直前で天井裏のショート箇所を特定できた、らしい。

初夏、安東の空が白んできた。いい天気だったが、「これから現場検証で時間が……」と覚悟した。ところが、消防隊長……「OK！」と笑顔でひと言。ホテル側からも沙汰無し……？ ……出火直前では「ケンチャナヨー」ってか？ (この場合、“まあ、よろしいかな”に相当か)

気を取り直し、義父が通った小学校へ。たまたま入った食堂のおやさんが案内をかってでた。そこはつい最近まで現存していたが取り壊しの真っ只中。義父75年前、日本に旅立つ時、「その駅から乗った」という安東駅から2つ目の小さな駅にも、おやさんは車を走らせてくれた。高速バス時代に完全移行した韓国。小さな駅は人を乗せることを止め、貨物駅としてだけに現存していた。駅前が消え、人影も皆無。半端な寂しさではなかった。

在日として生きてきた75年の歴史、その存在の虚無に“貨物駅”が重なった。記憶は遠い。おやさんの親切がなかったら、不明の旅になっていたはずだ。

「お礼を」と考え、申し出たが、やはり「ケンチャナヨー」と笑顔で返された。

富士山の世界文化遺産登録に思う

奥坊一広

富士山が世界文化遺産に登録され、富士登山する人が増えている。富士山は平成20年に初めて30万人を超えて以来年間30万人前後で推移してきたが、昨年は31万人で過去2番目の登山者を記録した。今年の世界文化遺産に登録されたということで、35万人から40万人の登山者が見込まれている。

富士山が世界文化遺産に登録されたから富士山に登ろうと思う人や富士登山を企画する旅行会社の気持ちはわからなくはないが、筆者は富士山に登ってご来光や景色を見たいとは思わない。富士山の独立峰としての美しさを遠方の景色として楽しみたい。今回、三保の松原も含んでの登録は、展望地から見た富士山の景観が古くから数多くの芸術作品を生んできたからの評価であり、だからこそ、自然遺産登録ではなく「文化遺産登録」になったことを認識しておかないといけない。

富士山は日本最古の歌集「万葉集」のなかで歌われ、芭蕉や蕪村の俳句の題材となり、江戸時代には葛飾北斎や歌川広重らが浮世絵として描いてきた。近代では小説や絵画、写真のモチーフになり、その中にはそれぞれの作品ができる過程での「ものごたがり」がある。そこには人がいて、人の足跡がある。

太宰治が「富嶽百景」のなかで書いた「富士には月見草がよく似合う」の碑がある峠から見る富士山はよい。太宰は妻・美知子とこの峠から見た当時は彼の新婚時代であり、おそらく太宰にとっても心癒されていたときではなかったか。妻の美知子にとっても思い出深いものだった、というようなことを読売新聞の日曜版「名言巡礼」にも出て

いた。そんな太宰にとってなぜ富士山に月見草なのか、といったことに思いを寄せてこの峠から富士山を見てみたい。

富士山の世界文化遺産登録が決まった頃に、山梨県甲府市で仕事があったので、時間を作って山梨県立文学館に足を運んだ。ちょうど「富士山と文学」をテーマにした特別展が開かれており、富士山とかかわった作品を残した作家を紹介していた。そこには太宰治はもちろん、芥川龍之介、井伏鱒二、武田泰淳、武田百合子、草野心平、高浜虚子、和歌山牧水ら名高い作家の作品がずらり。あらためて富士山に影響された作家の多いことに驚いた。

特設展の説明では「日本人があこがれと畏敬の念をいだいてきた富士山。古代から現代まで、富士をめぐる数多くの詩歌や散文が生まれてきました。文学者たちが富士にいかに向き合い、描いてきたか。文学に登場してきた様々な富士の姿を紹介します」とあった。作家が富士に向き合い、描いてきたなかに、太宰のような物語がそれぞれあるに違いなく、興味深い。隣接する山梨県立美術館では富士山を描いた展覧会が開かれており、画家によって富士山の捉え方のおもしろさも知った。

世界遺産登録で富士登山ツアーが大人気のようなだが、登るだけではなく遠くから「見て」物語を感じる富士ツアーは、着目されないのだろうか。

あずきあらいはどこにいる

高田公理

つねに変化し続ける「音」を求めて旅をする。そんな試みが新たな興味と関心と呼んでいるらしい。名づけて「サウンド・バム (Sound Bum)」——「バム (bum)」とは「なにかを探しながら放浪する旅」を意味するようだから、一言でいうと「音の旅」といったところか。そんな名前の立派なサイトがインターネット上にある (www.soundbum.org)。

ページを開くと、画面いっぱいToWorld地図が描かれていて、20か所たらずに印がつけてある。それらのどれかをクリックすると、マンガの吹き出しのようなパタンを描いた小地域の地図が示され、再びどれかをクリックすると、そこで採集した音が聞こえてくる。「ポルトガル、リスボンの街の音」なら「街は楽器。石畳の石は手作業でひとつひとつ、砂の間に埋められている」という記述と共に石畳の上を走る自動車の音が聞ける。「ハワイ島キラウエア火山」なら「噴火口から、いまも溶岩が流れ出ている。降りだした小雨が表面ではぜっていた」と書いてあって、それを彷彿させる音が流れてくる。オーストラリア「雨期のカカドゥ」は、ごろごろという雷の音の迫力がすごい。

マレーシアの場合は夕暮れのジャングルでのサルたちの大騒ぎ、台北の市場の場合は市街を疾駆する、おびただしい数のバイクのエンジン音、クアラルンプールの場合は屋台街のにぎやかさ……。訪れたことのある場所なら、その風景が生き活きとよみがえる。そして、訪ずれたことのない場所でも、なんだか不思議な旅ごころが搔きたてられる。

このように、音に惹かれて旅に出かける。

そして、旅先で耳にした音を記憶に残す。そこには旅の新しい楽しみ方のヒントが隠されているのかもしれない。

ところで、あたりまえの音に改めて耳を傾ける——音楽の世界で、そんなことを試みたのはジョン・ケージだろうか。1952年、彼は「4分33秒」の間、演奏せずにピアノの前にじっと座るという「演奏」で名を馳せた。結果、静かであるはずの音楽ホールに、前代未聞のざわめきが起きた。それは「偶然の音楽」の傑作の一つに数えられることになる。

おそらくは街にあふれる自動車、いろんな機械が発する騒音など、日常生活が喧噪で満たされるようになった20世紀半ばという時代が、この試みの背景にはあったのだろう。

さて、「耳をそばだてて何かをきく」——きっと昔は、そんなことが小さな楽しみであったり、時間の流れを確かめる方途の一つであったりしたのだろう。水木しげるの描く「あずきあらい」が、そんなことを思わせる。この妖怪は、姿は見せず、ただ川辺で、あずきを洗う音を立てるだけの小さな老人だとされる。何もいたずらなどしない。ただし、姿を確かめようとする人を見ると、川に落としてしまうこともあるらしい。そして、
「小豆洗おか、人取って喰おか」

こんな具合に歌いながら、シヨキシヨキと音を立てて小豆を洗うのだそうだ。

山深い谷川の畔か、それとも田舎町の橋の袂で、こんな音を耳にしたら、そこにはきっと「あずきあらい」がいる。そんな場所に、幸運にしてどこかで出会うことがあれば、のんびりした非日常の旅の記憶は一層、印象の深いものになるにちがいない。

編集規程および執筆要領について 概要

原稿受付は毎年 7/1 ～ 7/31，データ入稿に限る

ものがたり観光行動学会誌は、毎年 7 月末に原稿を締め切り、10 月に 1 巻 1 号を発行する。本誌に論文等を掲載できる者は、編集委員会が特に依頼する場合を除き、共同執筆の場合を含め個人会員名で発表する者に限る。その主な内容を以下に示す。

掲載する内容

1. 大会関係論文（依頼）
2. 研究論文（投稿）
3. 研究ノート（投稿）
4. エッセー（投稿）
5. 文献・図書（投稿）

査読の有無等

本学会編集委員会が別途定めた査読要領に基づき、掲載の可否を審査する。これらの詳細は、本学会ホームページ <http://narrative-tourism.org/> で公開する。

なお、規程・要領は学会誌の改善目的のために軽微な修正が加えられる場合がある。この場合、毎年 11 月末迄に上記のホームページ上に修正箇所を明記して公開する。

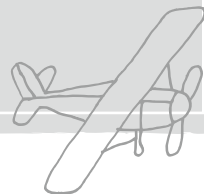


旅の 原稿を求めています

旅か観光か?……旅行を楽しんだあとは、旅先で得た出会いや発見、異文化体験・歴史体験、ほのかな恋心、ハプニングなど「ものがたり」を文章に起こし、その行動を一冊の中、記憶に留め置きたい……ものがたり観光行動学会誌は、研究論文・研究ノート
の他、「旅の記憶」をエッセーにしたため、社会に向けメッセージしたい。そう考え、旅の原稿を求めています。

ものがたり観光行動学会誌・年一回発刊

- 投稿は「学会員であること」のみが条件
- 毎年7月末締め切り／投稿への詳細は本学会ホームページ参照
- ただし!! 編集委員会によって「掲載可否」を決定!! ……すなわち少なからずハードルが存在する
- このハードルを越えるのも旅の楽しみ



ものがたり観光行動学会誌

ものがたり観光 Narrative Tourism 第3号

印刷 2013年10月15日

発行日 2013年10月16日

発行／ものがたり観光行動学会

会長／白幡洋三郎（国際日本文化研究センター）

編集代表／ものがたり観光行動学会誌編集委員長 加藤晃規（関西学院大学）

ものがたり観光行動学会

〒530-0041 大阪市北区天神橋2-5-11

TEL 06-6353-0029

FAX 06-6353-6649

✉ work@anata.org

デザイン・印刷／株式会社シンカ・コミュニケーションズ

〒586-0009 大阪府河内長野市木戸西町1-5-7

TEL 0721-52-5934 FAX 0721-53-3859

URL <http://www.cinca.jp> ✉ anata@cinca.jp



表紙について

鳥瞰絵師、吉田初三郎の描いた九州全域図、その一部分である。当時の新聞社、その元旦号の付録……「大正16年1月1日」という日付が興味深い。九州全域はおろか、遠く沖縄や中国大陸、朝鮮半島まで描く一方で、九州各地の鉄路が詳細に示されている。その遠近感のバランスと描ききる力に、舌を巻くばかりだ。

2013年10月16日発行



(製複許不)